

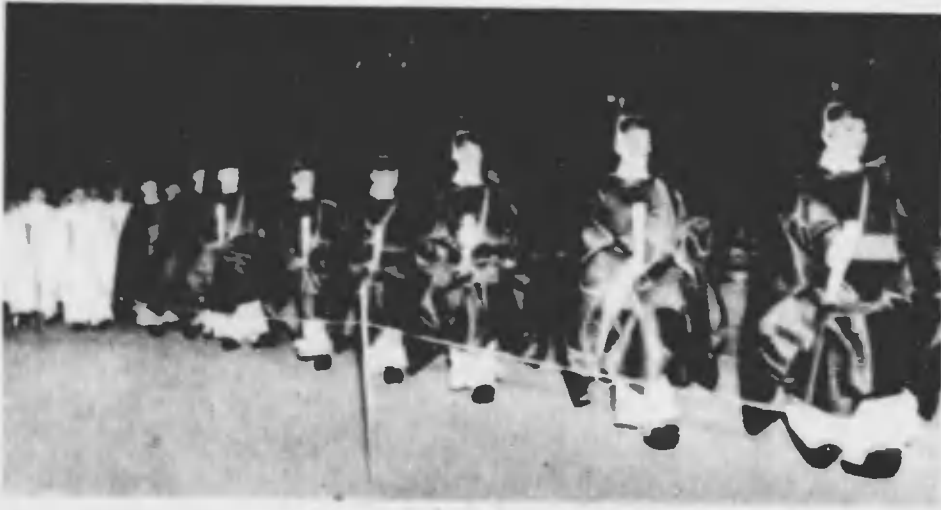
週寫眞
報眞

編輯部別青園内
シセ廿・號五十四百第・日卅月一十



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9

號時臨典祝年百六千二元紀



標原神社遷座祭は、木の香も新しく御造営
 成つた昭和十四年十一月十一日夜、露たちこ
 める神代ながらのしほの中に厳肅に執り行
 はれた

天泉陛下には、さきに大詔を渙發遊ばされ、神武天皇御創業當時の御艱苦を偲び奉つて時報を克服せよとの有難い御諭しを賜つたのであつた。われら一億同胞、大御心を體し奉り、恭しく聖壽の萬歳を唱和し、この住き年に際會しえた喜びを御ち合ふと共に、思ひを遠く神武の昔にはせて、われらが祖先の忠節を辱めないやう、賢賢の誓ひを新らたにしようではないか

神武天皇が標原の宮に即位の大業を擧げさせられてから悠久ことに二千六百年、億國民が上下ひとしく無限の誇りと喜びを以て待望した輝く年を今こそ迎へたのである。興亡つねなき各國の歴史を思ひめぐらすとき、世界に比なきこのうるはしい國體の下に生を享けたもの、誰かこの光榮に感激しないものがあらうか。しかも今や世界の東に西に矛盾の舊敷を打ち破る戦火赤々と燃える中に、大東亞共榮團の確立、更に世界新秩序建設の大理想實現に邁進するときわれらはこの記念すべき年を迎へたのである。實めをこの世に負ふもの誰か新らたなる奮起を誓はないものがあらうか

讀んで按ずれば、神武天皇長くも皇祖皇考の遺訓を體し給ひ、御親ら諸々の皇子舟師を率ゐさせられて東の方征途につかせ給ふたが、ゆくゆく聖德を解せぬ精悍暴戻の變民また多く、やうやくこれを討ち從へさせられて、つひに六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて字とせむと仰せられて大和標原の宮に即位し給ふまで、その間の御精勵御困苦は如何ばかりであつたらう。御即位の盛儀に諸皇子と共に列するをえたわれらの祖先が、歴戦の艱苦を額に刻みつけ、目のあたりにうけた感激はどんなであつたらう

以來皇統連綿として二千六百年、歷朝仁徳を以て民草を愛み給ひ、臣民相率ゐて盡忠報國の誠を捧げて幾度かの國難を斥け、皇基愈々堅く、國運隆昌の一途を辿つて今日及び、建國以來未曾有の國威伸張の機に臨む。一君の下萬民心を一にして從はざるを聲ち、和するものを一字のうちに收めて皇祖の遺訓に答へまつるべきは、その紀元を距ること遠大ではあるが、その使命と意義に於ては神武の古と今と甚だ近きものあるを覺えるのである

この歴史的の年に當り、畏くも

祭節元紀

日一十月二年五十和昭

皇統運轉として二千六百年、建國景仰の佳節を迎へた一億國民の無限の歡喜、感激を表現する祝典は二月十一日の紀元節祭の祭典に始まつた。宮中におかせられても本年の紀元節祭は特に重く執り行はせられた。この日、天皇陛下には長くも優渥なる詔書を頒發せられ、内外重大時局に際し萬民實實の道を示されられた。

詔書

朕惟フニ神武天皇惟神ノ大道ニ遊ヒ一系無窮ノ寶祚ヲ繼ギ萬世不易ノ丕基ヲ定メ以テ天業ヲ經綸シタマヘリ歷朝相承ケ上仁愛ノ化ヲ以テ下ニ及ボシ下忠厚ノ俗ヲ以テ上ニ奉ジ君民一體以テ朕ガ世ニ速ビ茲ニ紀元二千六百年ヲ迎フ
今ヤ非常ノ世局ニ際シ斯ノ紀元ノ佳節ニ當ル爾臣民宜シク思フ神武天皇ノ創業ニ勝セ皇圖ノ宏遠ニシテ皇謨ノ維深ナルヲ念ヒ和衷戮力益國體ノ精華ヲ發揮シ以テ時觀ノ克服ヲ致シ以テ國威ノ昂揚ニ助メ祖宗ノ神靈ニ對ヘンコトヲ期スベシ

御名 御璽

昭和十五年二月十一日



▷ 東京銀座通りはこの日奉祝の旗、鐘、日、祝ふ人の波に埋められた

▷ 帝都の水上市典は芝浦で行はれ、滿船の五十餘隻は隅田川に「曹仲無窮」の旗を川風にためかして水上から佳節を誇りだ

▷ 榮えある御代に生を享けた喜びを一杯に、可愛い武者衣通は九段増圓神社に元氣な行進を行つた

▷ 白雪に以上上清められた根原神宮にはこの日敬虔な官民多数の参拜者が列を作つた





光輝ある紀元二千六百年を奉祝する國家的な記念事業を行ふため、昭和十年十月紀元二千六百年祝典準備委員会が設けられたが、次いで昭和十一年七月一日紀元二千六百年祝典評議委員会が設けられて本格的にその審議に當り、左の事業を決定したのであった

- 一、權原神宮境域並びに畷傍山東北陸参道の擴張整備
- 二、宮崎神宮境域の擴張整備
- 三、神武天皇聖蹟の調査保存顕彰
- 四、御陵参拜道路の改良
- 五、国史館（假稱）の建設
- 六、日本文化大觀の編纂出版

これらの事業は官民協力、國を挙げて施行に當ることとなり、昭和十二年七月七日財團法人紀元二千六百年奉祝會が設立された

紀元二千六百年奉祝會は、畏くも秩父宮殿下を總裁に仰ぎ、總額一千三百萬圓の巨費を投じてこの大事業を行ふこととなつた。畏くも皇室におかされてはこの記念事業を助成し給ふ厚く思召から御内帑金百萬圓を下賜あらせられたが、國民また金品の寄附に、献木運動、或ひは勤勞奉仕にその赤誠を捧げ、諸工事は意想外に早く進捗してその大部分は、いづれも所定の期日までに見事完成し祭ある盛儀を迎へたのであった

昭和十三年四月十日、紀元二千六百年奉祝會は畏くも秩父宮殿下の台座を仰いで明治神宮外苑に盛大な總裁奉戴式を舉げた

御宮眞は令旨を賜ふ秩父總裁宮殿下

各種の記念事業は すゝめられた

宮崎神宮境域の擴張整備



上 境域擴張工事成つて森厳限りなき宮崎神宮
下 宮崎神宮境域の擴張整備に活躍する組織振興隊大員

御陵参拜道路の改良

淳和天皇御陵



上 淳和天皇御陵西嶺上段——改修前の御陵
下 参拜道路の改修に勤勞奉仕をする平安中學生

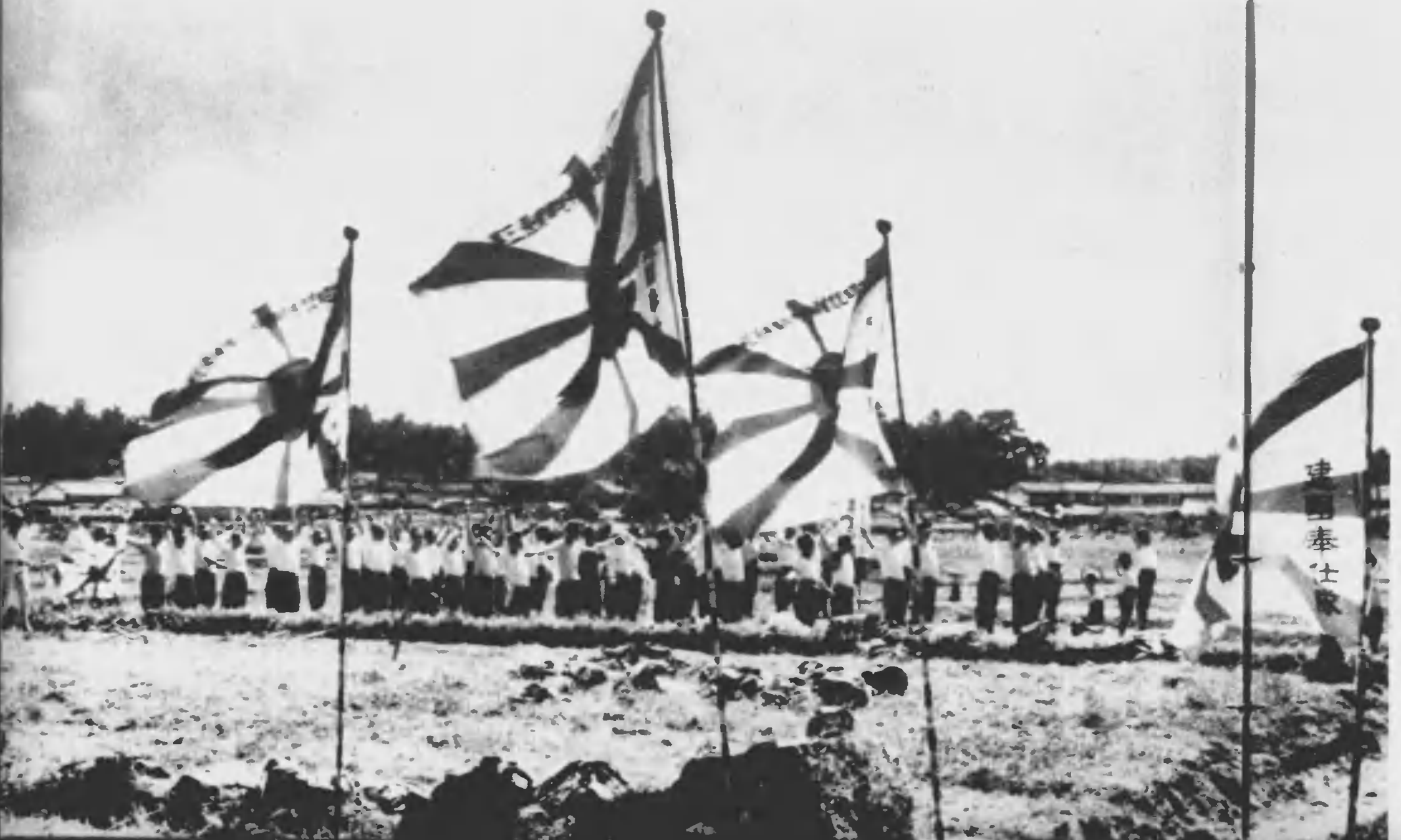


權原神宮境域擴張並びに畷傍山東北陸参道の擴張整備

下右 はる／＼満洲國からも協和青年團原神宮御造苑奉仕隊百九名が参加した

下中 女子青年團員もかひ／＼しく奉仕の力を捧げた

下左 勤勞奉仕隊人員百二十萬人、全國各府縣の學生生徒、青年團はもとより、官公衛、會社、工場その他一般から結成された建國奉仕隊は連日聖域に奉仕の誠を捧げた



訪來御 下陸帝皇國洲滿

月六年五十和昭



天皇陛下には、御着京の皇陛下を親しく東京驛に御出迎へ遊ばされ、驛頭に於て固き御握手を交させられた

滿洲國皇帝陛下には輝く紀元二千六百年に當り、親しくわが皇室に御祝意を表されるため、御召艦日向に召させられ、六月二十六日横濱港御着御來訪あらせられた。皇帝陛下には天皇、皇后兩陛下に御對面、御鄭重な御祝詞を述べさせられた後、靖國神社、伊勢神宮、樺原神宮、山陵等に御參拜、七月六日大阪御出港、御恙なく御歸國遊ばされた



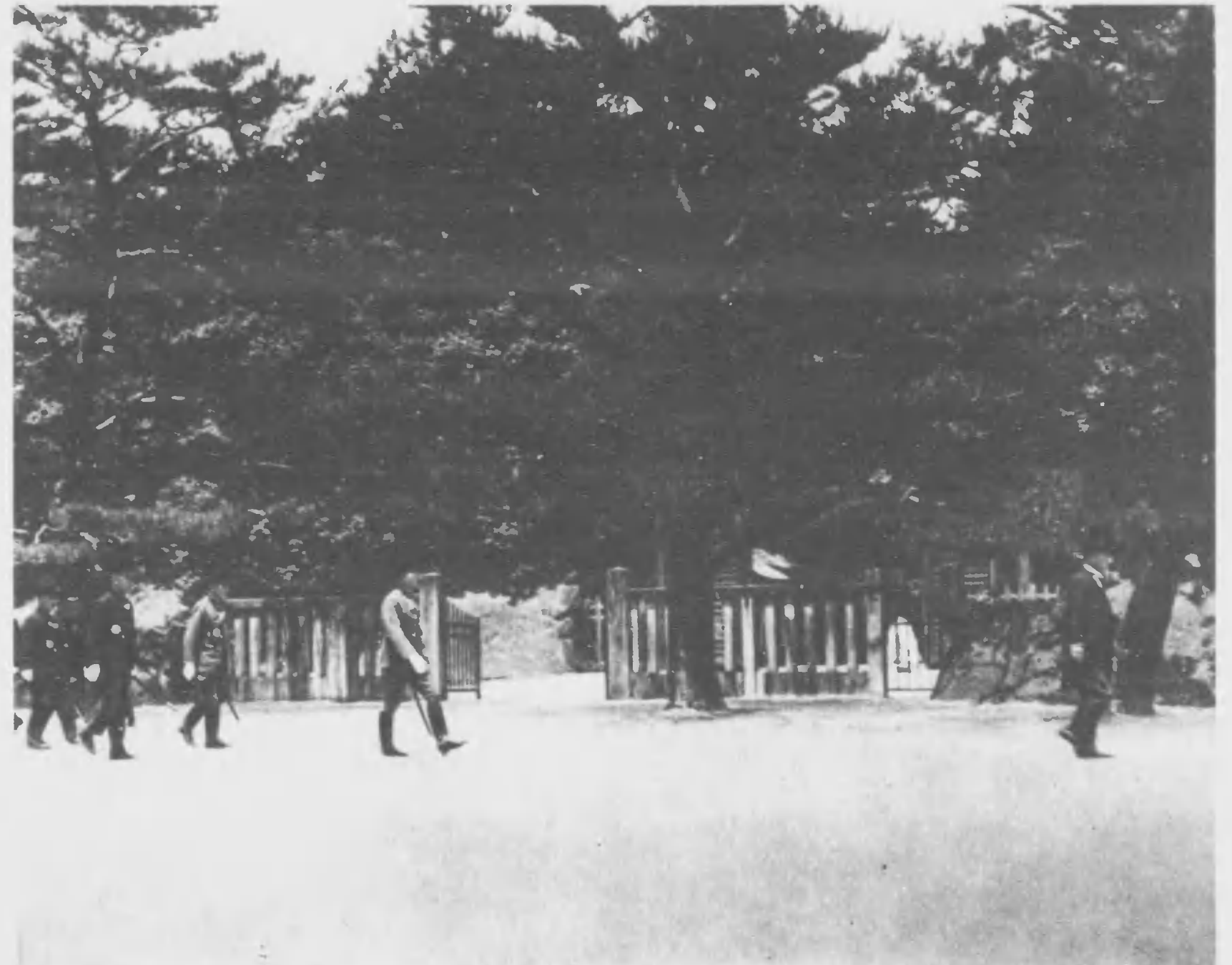
皇陛下 樺原神宮に御參拜を終へさせらる



横濱に御上陸の皇陛下、中央御白服を召させられるは御出迎への高松宮殿下

幸行西關 下陸皇天

月六年五十和昭



佳年の夏長くも 天皇陛下には、紀元二千六百年の御奉告と時艱克服を御祈念のため、六月九日宮城御發轍、關西方面に行幸遊ばされ、皇大神宮、豐受大神宮及び、神武天皇畝傍山東北陵、仁孝天皇後月輪陵、孝明天皇後月輪東山陵、明治天皇伏見桃山陵等に御參拜御途次樺原神宮へも御參拜あらせられた

御實上は 天皇陛下 神武天皇畝傍山東北陵に御親拜あらせらる 下は御直躰宇治橋にさしからせらる

特別観艦式

昭和十五年十月

紀元二千六百年奉祝特別観艦式は、十月十一日秋晴れに風きわたる横濱港外において厳肅盛大に舉行された。長くも天皇陛下には戦艦比叡に召させられ、先導艦高雄、供奉艦加古、古鷹を随へさせられ、参加の聯合艦隊旗艦長門以下軸體相ふくむ艦種百餘隻の精銳、及び大空を壓した海鷲五百機の大編隊が示した堂々の威容を親しくみそなはせられた。

この日天皇陛下には長くも優渥なる勅語を賜はり、複雑微妙な國際情勢の下わが海の護り愈々重大を加へる秋皇軍將兵の益々奮勵努力すべきことを御諭し遊ばされた。

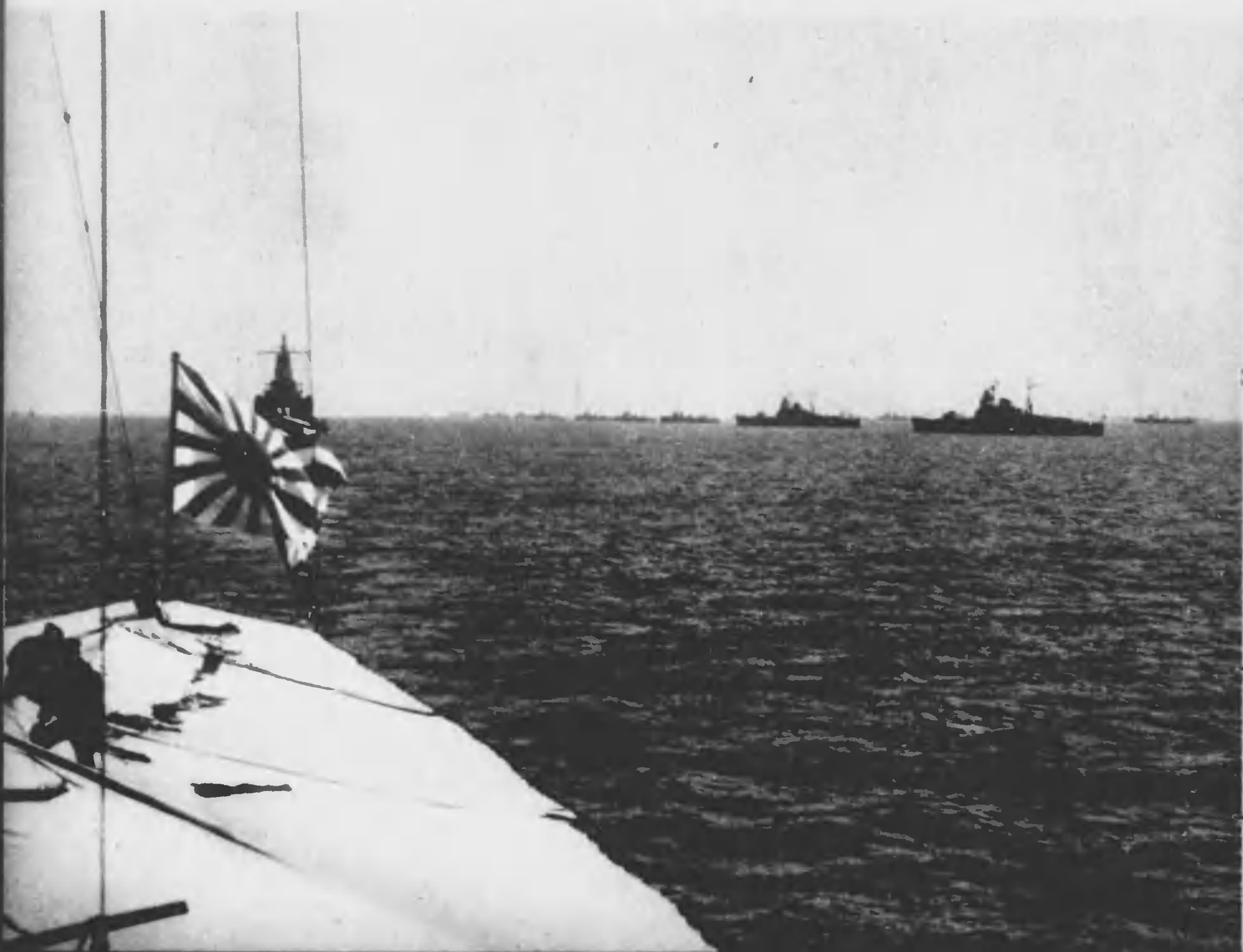
天皇陛下には長くも双眼鏡を御手に御召艦比叡の前艦橋から艦種をみそなはせられた

二集團から成る海鷲五百機の空中分列式



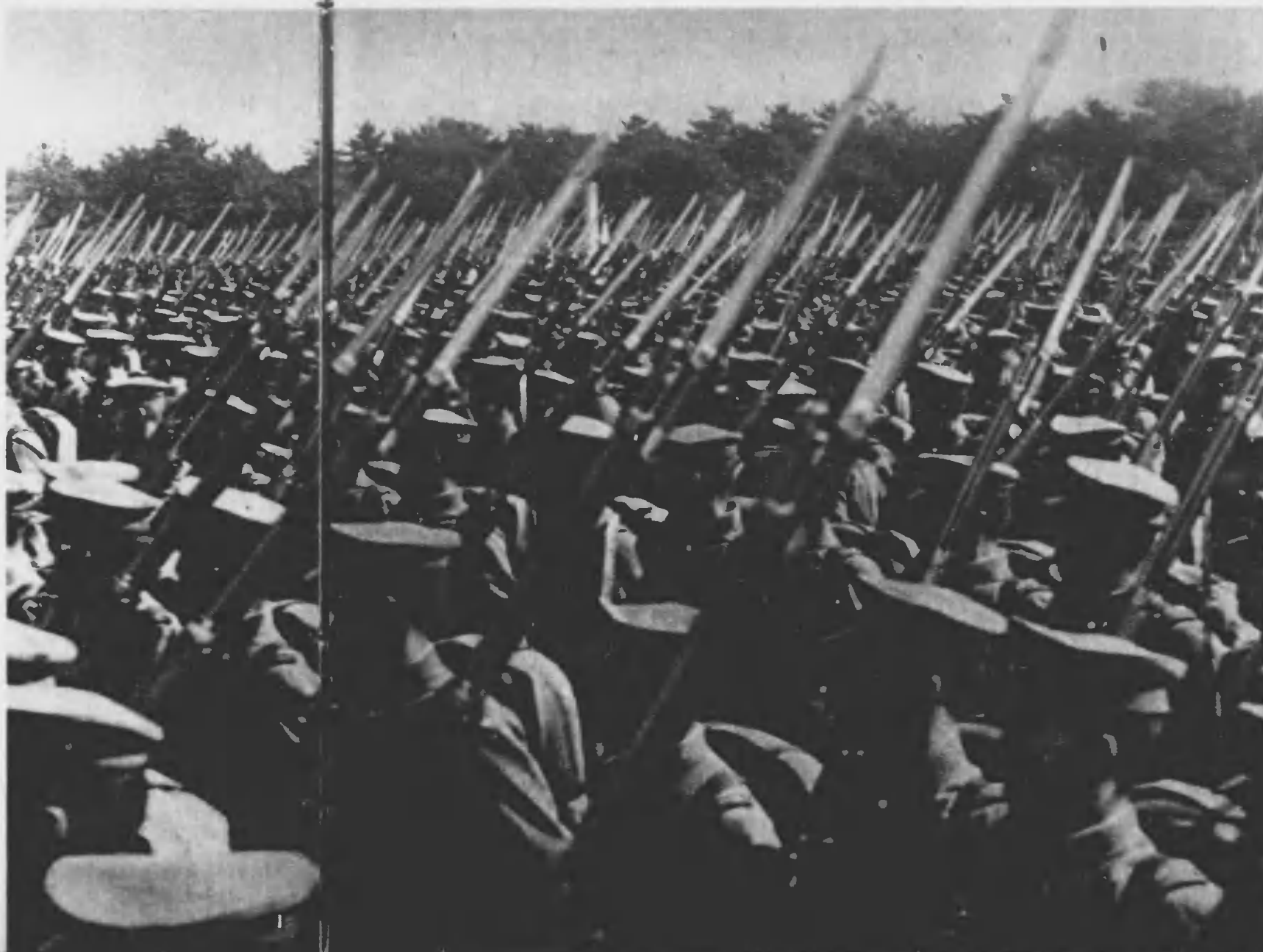
空中から見た堂々の各艦列

旗艦として居並ぶ晴れの式場



式兵観念記

月十年五十和昭



紀元二千六百年記念観兵式は、十月二十一日長くも天皇陛下の
行幸を仰ぎ奉り、諸兵指揮官朝香大將宮殿下御指揮の下に秋色濃き
東京代々木練兵場において舉行された
天皇陛下には聖勳第四年武威愈々高きわが陸軍の精銳を御親閲、長
くも優渥なる勅語を賜つたが、全軍將兵はひたすら恐懼感激、重大
使命の達成を誓ひ奉つた

天皇陛下には、御愛馬白雪に召させられ、
諸兵を御親閲遊ばされた

下 劇突たる樂の響に合せてわが陸の精銳の
大分列行進

左 空には空軍部隊の爆音、地上には陸軍隊
の轟音、代々木原頭に展開された搖ぎなきわ
が陸の護り

式殿造営成る

※ある式典並びに奉祝会の執り行はれた宮城外苑の式殿工事は、八月八日の起工式以来、紀元二千六百年奉祝会その他関係者一同鋭意竣工に努めた結果、順調に進行、本屋百八十坪、附屬屋百坪の神殿造り、杉皮葺の式殿は美事に完成、晴れの日に迎へたのであつた

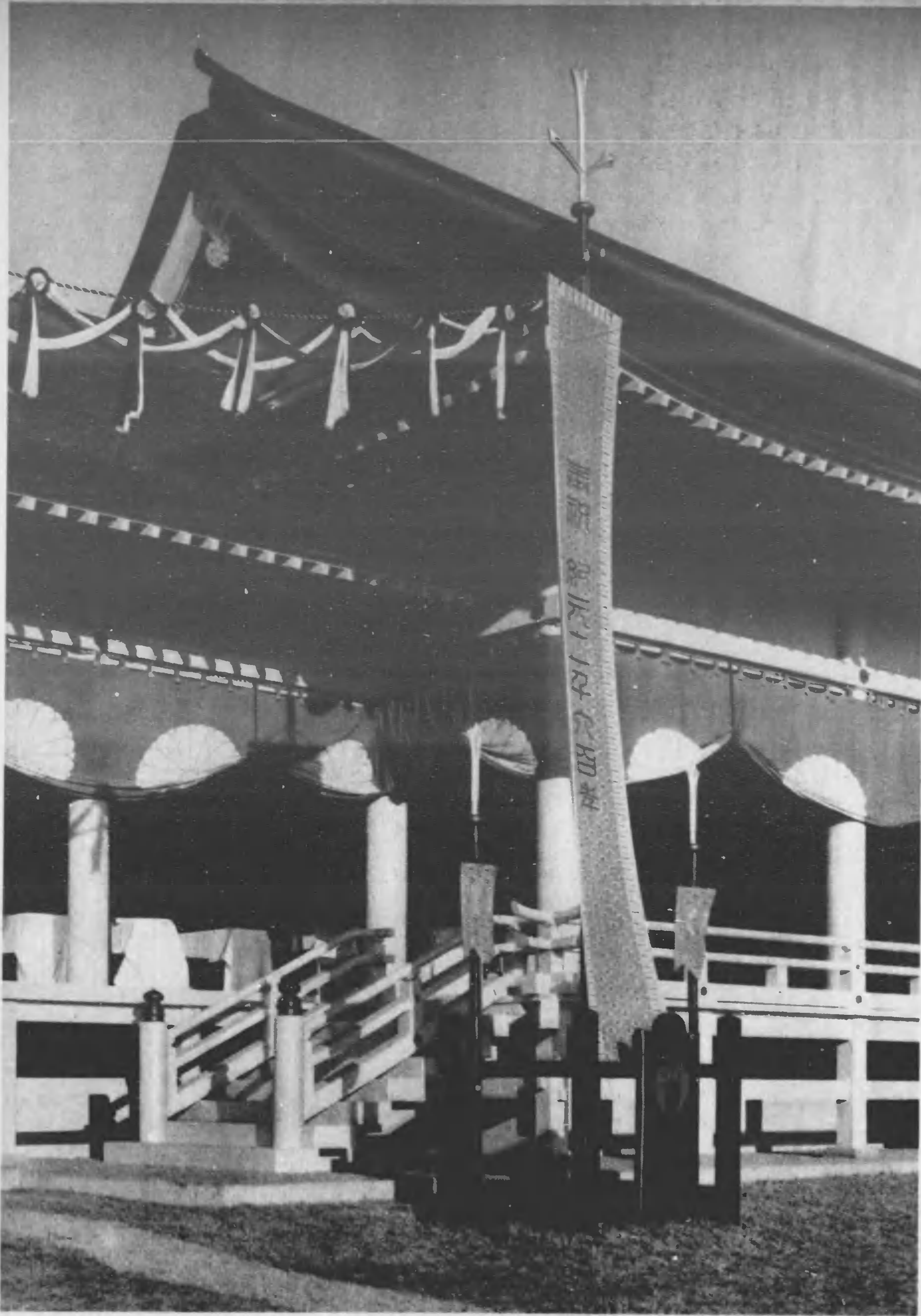
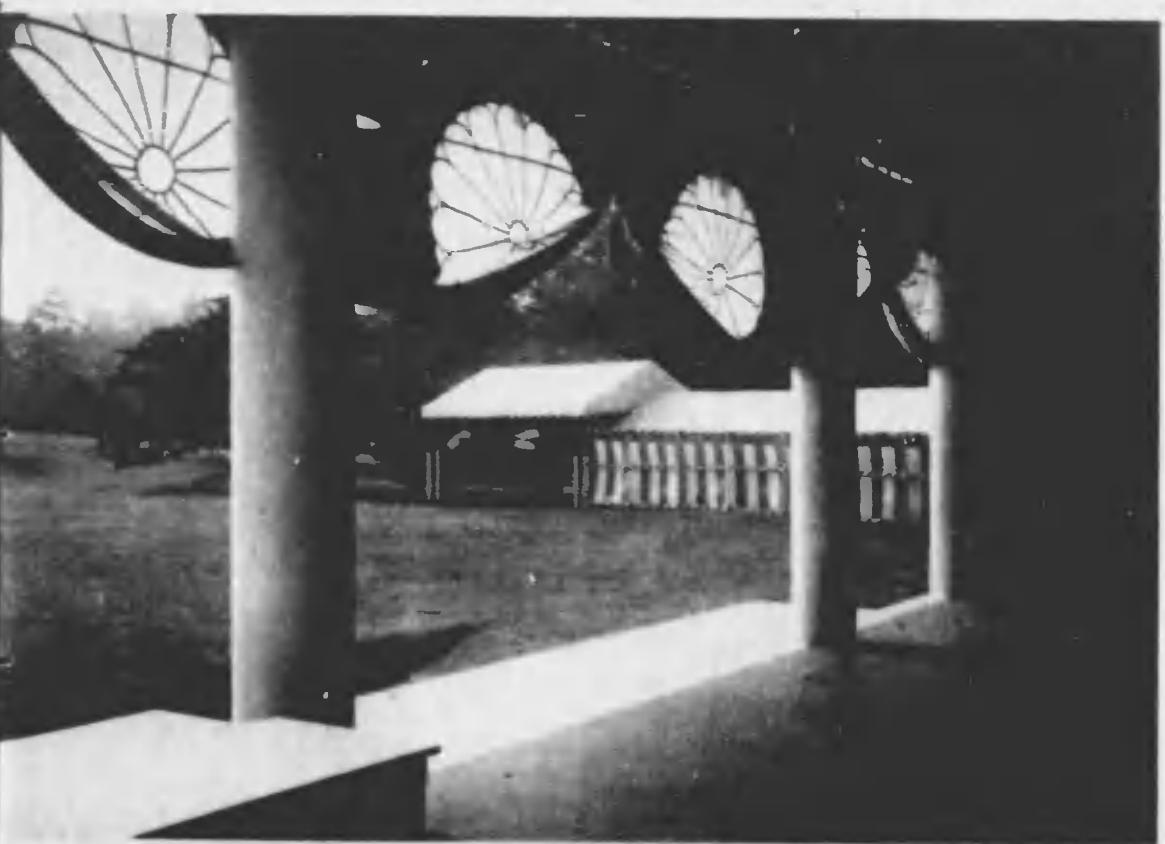
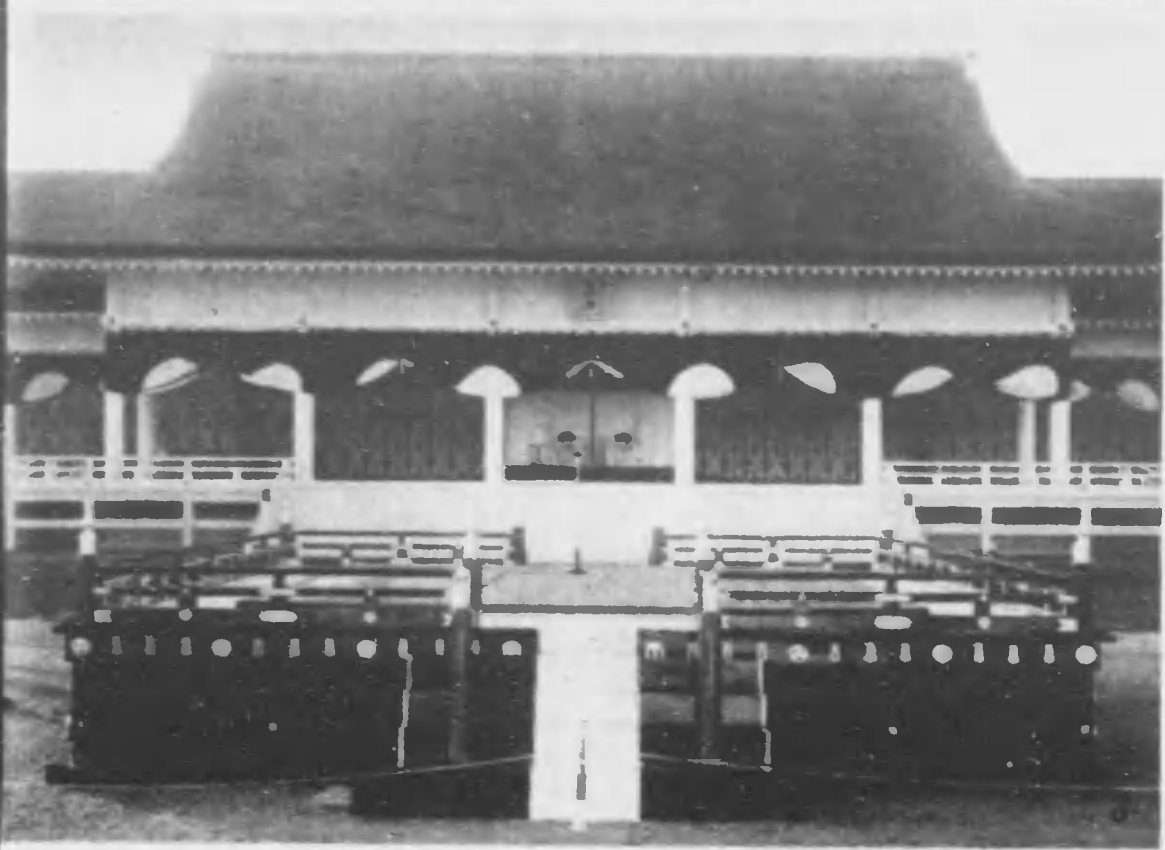
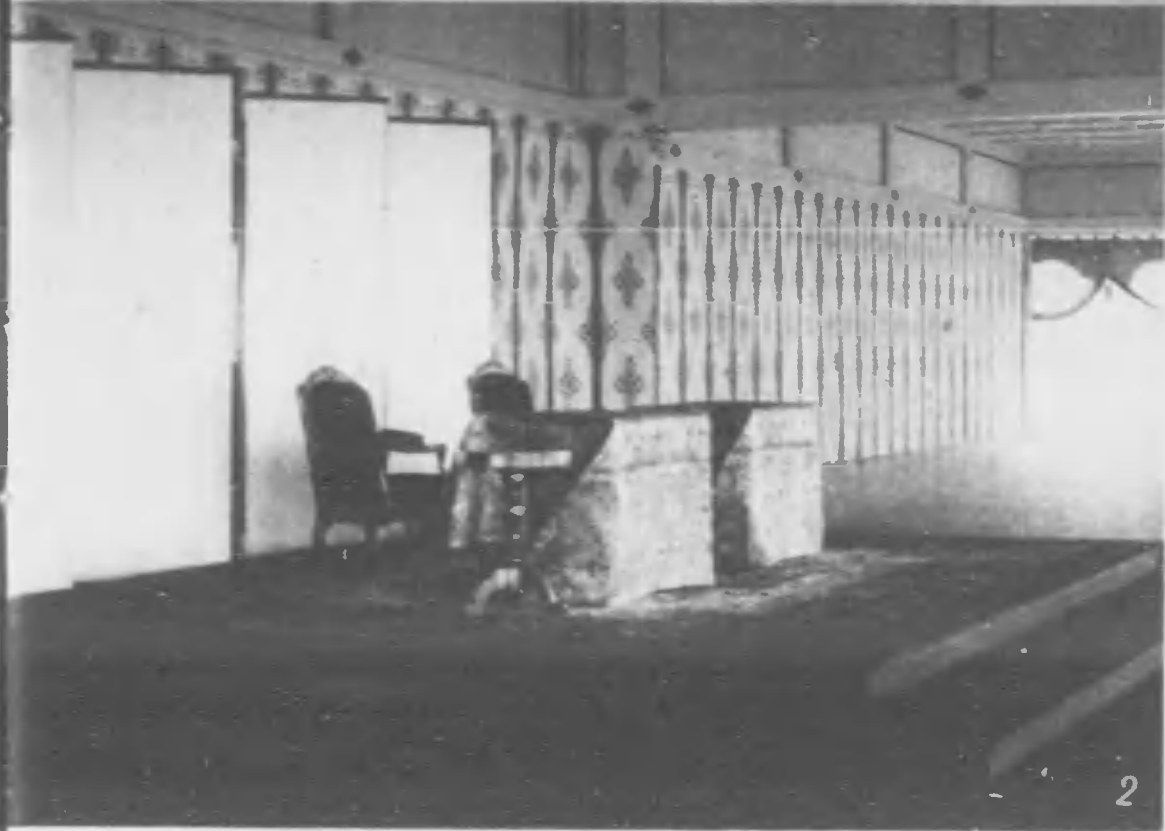
1 便殿から式殿に出御遊ばされる出御口、典雅な藍色模様の御座代を開いてしつらはれてゐる

2 式典當日、天皇、皇后兩陛下の臨御遊ばされた玉座(左並びに御座、三段になつた御座臺上)に上られた玉座並びに御座の御座には青地錦の御車被がかげられ、金色燦然たる御文錦が一雙づゝ御卓上を飾つてゐる。青地錦の御座付御椅子には紫のビロードが張られ、玉座の向つて左には栗地御座散らしの御座が置かれてゐる。又、玉座並びに御座の背後には兩面金四曲障風一雙がしつらはれてゐる。なほ、奉祝會當日には御卓に赤地錦御車被がかげられ、御椅子は栗地御座散らし御座付御椅子に取りかへられた

3 式殿前の舞臺、朱塗りの欄干が華やかに秋晴に映える。こゝで奉祝會當日奉祝舞樂「悠久」が宮内省樂部員によつて雄壯にうち舞はれ、天皇並びに台座の光榮に浴したのである

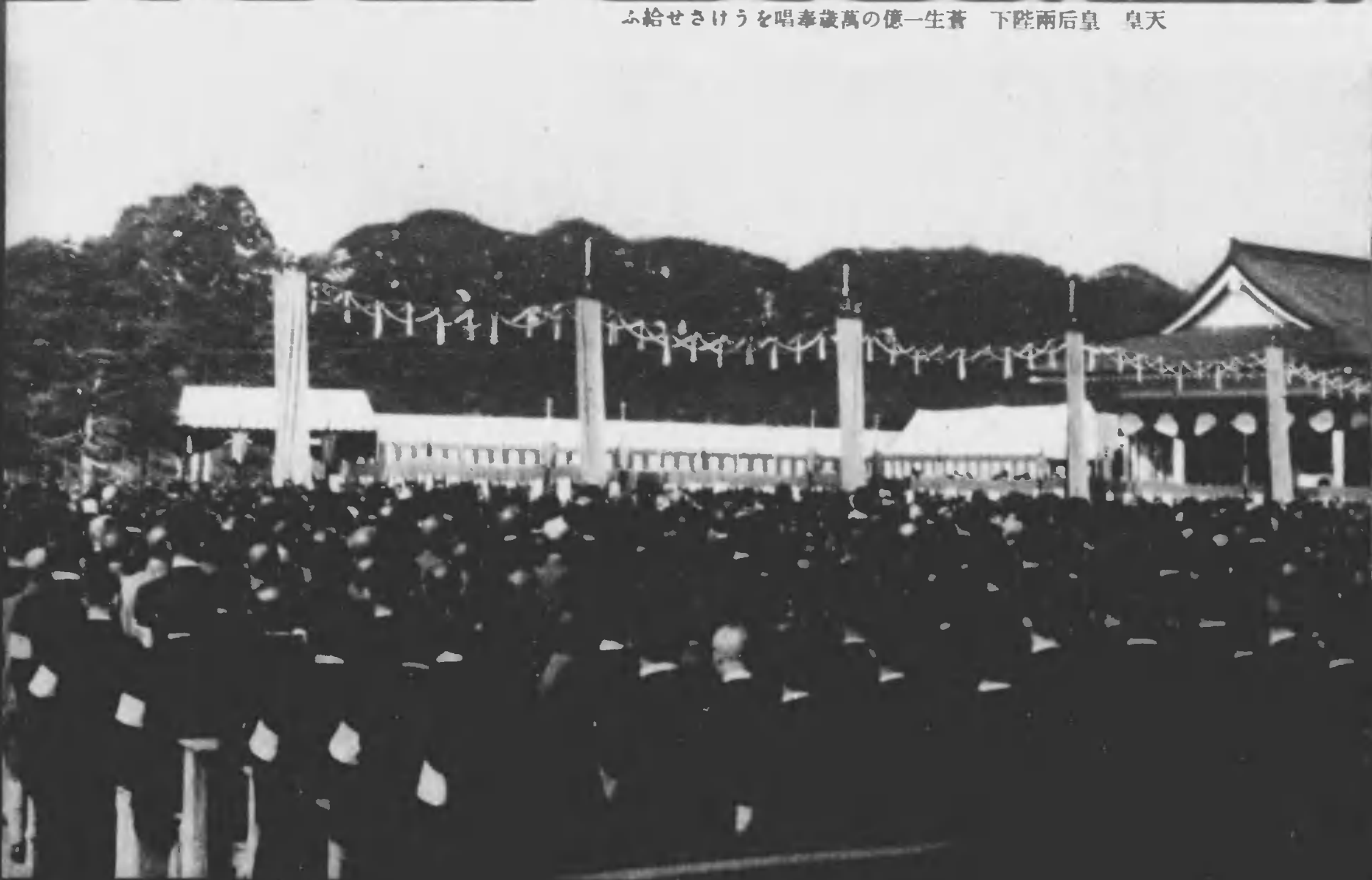
4 式殿から屋外御車寄を望む。外苑廣場の然の雄が式場一帯にたへがたい威厳さを加へてゐる

5 奉祝紀元二千六百年の文字も鮮やかに式殿左右を飾る錦幕、式殿には紫細縹御紋付幕が微風にゆらいでゐる





天皇皇后陛下 蒼生一億の歳奉唱をさけさ給ふ



勅語

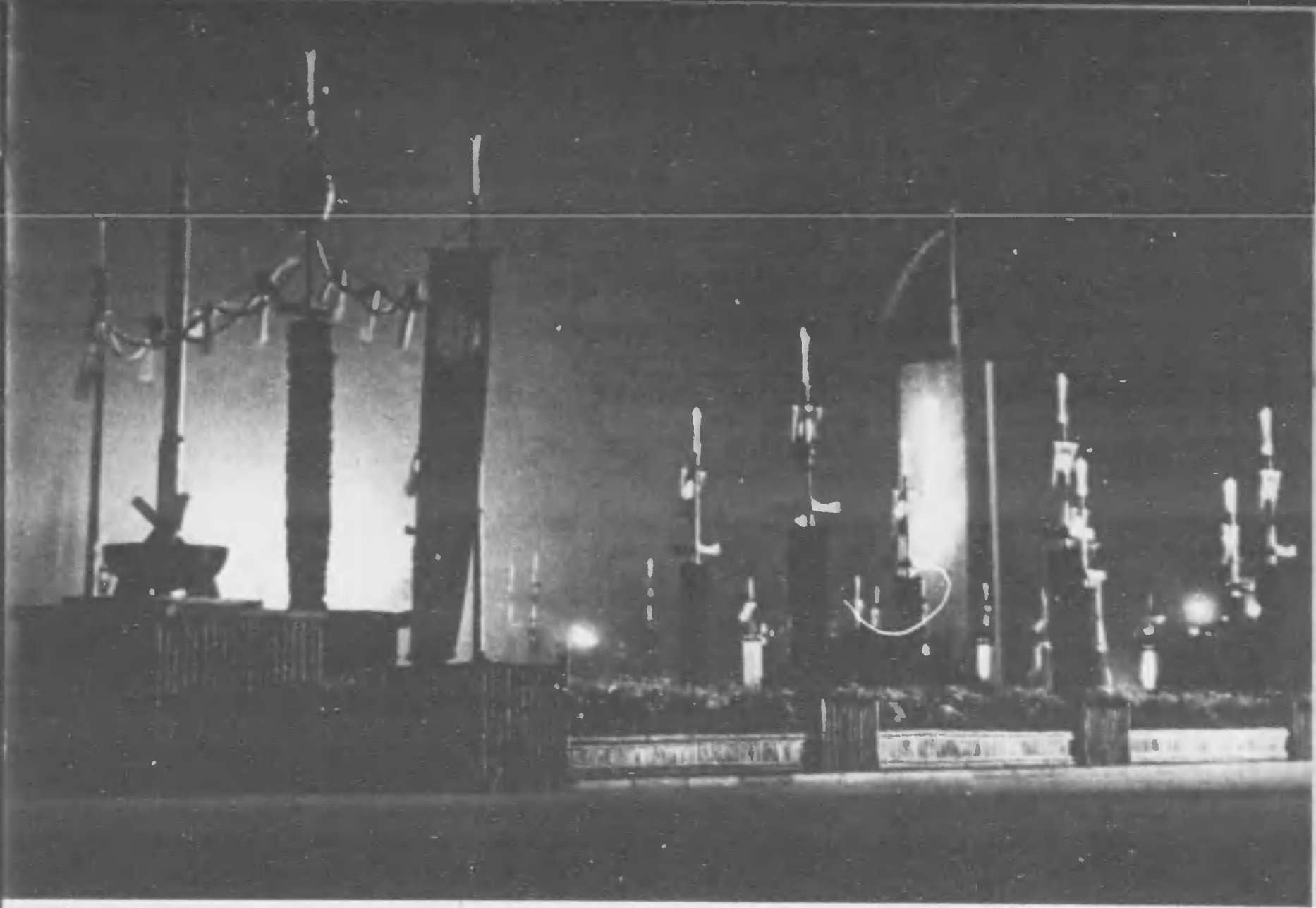
茲ニ紀元二千六百年ニ膺リ百億敬庶相會シ之レカ
 慶祝ノ典ヲ舉ケ以テ皇國ノ精神ヲ昂揚セントスル
 ハ朕深ク喜レテ嘉尚ス
 今ヤ世局ノ激變ハ實ニ國運隆替ノ由リテ以テ判カ
 ルル所ナリ爾臣民其レ克ク需ニ降タシシ言諭ノ趣
 旨ヲ體シ我カ惟神ノ大道ヲ中外ニ顯揚シ以テ人類
 ノ福祉ト萬邦ノ協和トニ寄與スルアラント期
 セヨ

紀元二千六百年囀歌

紀元二千六百年囀歌

名刺客の千五萬五るげし申ち
 くまつりよ貞前真宮

名刺客の千五萬五るげし申ち
 くまつりよ貞前真宮



塔敷奉く輝に空夜の山内大

浴榮謹想

祝典に参列して

吉川英治謹記

「菊の咲く日本に生れ日本晴れ
誰やらの句である。
秋となれば、常でさへ、われわれ日本人は、
かうした幸福感をこの國土に抱くものを、まし
てことし紀元二千六百年の大式典に、階下速く
参列の光榮に浴して、わたくしは昭代のありが
たさに、その日の雲もない一天の秋空さへ、餘
りにまばゆく、勿體ないこゝちがした。
何よりも、何よりも、臣民としてうれしかつ
たことは、われらの 天皇の御體におは
します御影を、遙ながら拜し得たことであつた
又、
勅語
を賜はつた瞬間の身もしびれるばかりな感激
であつた。五萬餘といふ臣民は霞のやうにひそ
まり返つた。直立不動、一齊に心もち頭を下げ
たまひ、その間、嗚咽ひとつ聞かれなかつた。
畏れおほいことながら、陛下の玉音は、御力
に満ちて、御ゆたかなその御聲は、われら
れ列末の布衣に至るまで、ありありと耳朶に拜
すことができた。感泣とは、かゝるせつなの崇
高なたましひの内面的な運動であらうか、わた
くしはわが身ともなく熱いものが眼から流れさ
うでならなかつた。
當日の感想を翌日の新聞の上に、佐々木信綱
氏も菊池寛氏もわたくしも書いたが、偶然、三
人ともその感想は同じことを書いた。それは、
は、二千六百年の前、わたくしたちの大祖たる
人々も、神武天皇の標原の紀元の御式に列して
今日のわれれと同じやうな固い誓と感激を抱
いて、式の御苑に立つたことであらう」とい
ふ追想であつた。
思ふに、
われわれ日本臣民には、歴々二千六百年、不
變のものが二つある。それは、建國の理想と、

君臣一如の血潮のながれである。
大亞細亞建設の皇國の理想は、いふまでもな
く、神武の聖業の繼承である。二千六百年來の
大業を、こゝに一段階、世界的に踏みのぼらん
とすることである。
血潮は、
われわれの身にもつ血潮こそ生々と建國以來
の願をなほ現實の現し身に賦持つてゐるもの
である。この血に問へば、日本とは何か、自分
とは何か、臣道は何か、賢賢とは何か、答への
ないものは一としてない。
海陸軍の祝砲がとどろく。
全員は、再起立して、國歌を奉唱した。近衛
首相の發聲に従ひ、諸聲あはせて萬歳を三唱し
た。
この聲こそ、大和民族が、今日の信念を、世
界に告ぐるの聲であつた。おそらく参列の諸外
國の使臣も、さう聞いたであらうと思ふ。
第二日目の祝典には、五萬餘の参列者が悉く
も 兩陛下の御前に至るまで、五萬餘の参列者が悉く
に浴し、われわれは一碧澄澄の秋空の下に、畏
くも 兩陛下と同じ野戰料理をひらきあうて、
式場中央の舞臺に樂人たちの舞ふ古樂の振や音
樂に、神々しい中古の御式の様を偲びながら、
和氣篤々、時代の聖恩に心からなかりがたさを
賢へ合つたのであつた。
陛下におかれても、龍顏晴やかに、親しく、
五萬餘の臣民共に、そのあひだ御杯をいくたび
か御辱にはこぼれたやうに拜された。君臣ひと
つに完く溶和したかゝる光景こそは、全世界の
いづこにも見られない、わが日本の地上に於て
のみ見る眞の美しさではあるまいか。人類の最
高の理想は、かくの如く高い理想のなかに、深く
樂しく和樂することにあるものを、いつの日か、
大亞細亞國內の民みなに、この幸を、この偉大
な幸福を、頒け與へてやることができようぞ。
わたくしは日本臣民のひとりとして生れた幸を思
ふと共に、廣く大きく、更に、それを思つて、
その日の來るべき運成へ、ひそかに明日への誓
ひを思ひ固めずにはいられなかつた。



奉祝國民歌
紀元二千六百年

一金鶏舞く 日本の
榮ある光 身にうけて
いまこそ祝へ この朝
紀元は 二千六百年
あ、一億の 胸はなる
二 歡喜あふるる この土を
しつかとわれら 踏みしめて
はるかに仰ぐ 大御
紀元は 二千六百年
あ、盛國の 雲青し

皇太子殿下には、十一月十一日皇學院初等科
の奉祝行事に御臨成、御學友と宮城を御遊幸
後、奉祝國民歌「紀元二千六百年」を御唱和
遊ばされ、山梨院長の訓話を御熱心に御聽き
遊ばされた。

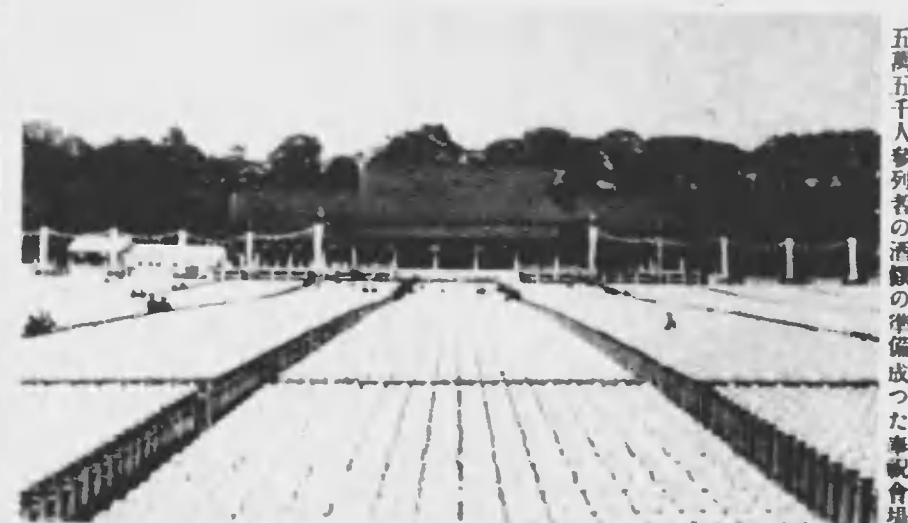


大阪中之島公
園の音楽祭典

紀元二千六百年
奉祝會

昭和十五年十一月十一日

蒼生一億の捧げ
まつる佳き年の壽
ぎ、紀元二千六
百年奉祝會は、式典
に引きつゞいて翌
十一日午後二時か
ら宮城外苑の同じ
場所に再び
天皇 皇后兩陛下
の行幸行啓を仰ぎ
全國の代表五萬五
千名が参列の光榮
に浴して盛大に舉
行された



五萬五千人参列者の酒饌の準備成つた奉祝會場

紀元二千六百年奉祝會次第

- 一、開會
- 二、職員最敬礼
- 三、職員最敬礼
- 四、職員最敬礼
- 五、職員最敬礼
- 六、職員最敬礼
- 七、職員最敬礼
- 八、職員最敬礼
- 九、職員最敬礼
- 十、職員最敬礼
- 十一、職員最敬礼
- 十二、職員最敬礼
- 十三、職員最敬礼
- 十四、職員最敬礼
- 十五、職員最敬礼
- 十六、職員最敬礼
- 十七、職員最敬礼
- 十八、職員最敬礼
- 十九、職員最敬礼
- 二十、職員最敬礼
- 二十一、職員最敬礼
- 二十二、職員最敬礼
- 二十三、職員最敬礼
- 二十四、職員最敬礼
- 二十五、職員最敬礼
- 二十六、職員最敬礼
- 二十七、職員最敬礼
- 二十八、職員最敬礼
- 二十九、職員最敬礼
- 三十、職員最敬礼
- 三十一、職員最敬礼
- 三十二、職員最敬礼
- 三十三、職員最敬礼
- 三十四、職員最敬礼
- 三十五、職員最敬礼
- 三十六、職員最敬礼
- 三十七、職員最敬礼
- 三十八、職員最敬礼
- 三十九、職員最敬礼
- 四十、職員最敬礼
- 四十一、職員最敬礼
- 四十二、職員最敬礼
- 四十三、職員最敬礼
- 四十四、職員最敬礼
- 四十五、職員最敬礼
- 四十六、職員最敬礼
- 四十七、職員最敬礼
- 四十八、職員最敬礼
- 四十九、職員最敬礼
- 五十、職員最敬礼
- 五十一、職員最敬礼
- 五十二、職員最敬礼
- 五十三、職員最敬礼
- 五十四、職員最敬礼
- 五十五、職員最敬礼
- 五十六、職員最敬礼
- 五十七、職員最敬礼
- 五十八、職員最敬礼
- 五十九、職員最敬礼
- 六十、職員最敬礼
- 六十一、職員最敬礼
- 六十二、職員最敬礼
- 六十三、職員最敬礼
- 六十四、職員最敬礼
- 六十五、職員最敬礼
- 六十六、職員最敬礼
- 六十七、職員最敬礼
- 六十八、職員最敬礼
- 六十九、職員最敬礼
- 七十、職員最敬礼
- 七十一、職員最敬礼
- 七十二、職員最敬礼
- 七十三、職員最敬礼
- 七十四、職員最敬礼
- 七十五、職員最敬礼
- 七十六、職員最敬礼
- 七十七、職員最敬礼
- 七十八、職員最敬礼
- 七十九、職員最敬礼
- 八十、職員最敬礼
- 八十一、職員最敬礼
- 八十二、職員最敬礼
- 八十三、職員最敬礼
- 八十四、職員最敬礼
- 八十五、職員最敬礼
- 八十六、職員最敬礼
- 八十七、職員最敬礼
- 八十八、職員最敬礼
- 八十九、職員最敬礼
- 九十、職員最敬礼
- 九十一、職員最敬礼
- 九十二、職員最敬礼
- 九十三、職員最敬礼
- 九十四、職員最敬礼
- 九十五、職員最敬礼
- 九十六、職員最敬礼
- 九十七、職員最敬礼
- 九十八、職員最敬礼
- 九十九、職員最敬礼
- 一百、職員最敬礼



参列者に供された酒饌と記念品

勅語

愛ニ紀元二千六百年慶祝ノ趣ニ臨ミ各國代表者並ニ朝野ノ代表者ト歡ヲ繋クシ樂ヲ倍ニスルハ朕ノ深ク博ク所ナリ
 今ヤ一大世變ニ際會スルモ平和ノ日ナラスシテ恢復セラレ萬邦ト俱ニ其ノ慶ニ賴ランコトヲ望ム

紀元二千六百年奉祝會總代理理事聲明

紀元二千六百年奉祝會總代理 臣宣仁
 謹ミテ言ス伏シテ惟ミルニ

神武天皇

皇祖ノ神勅ヲ奉シ天壤無窮ノ 實ヲ踐ミ給ヒシヨリ
 列聖相承ケテ

陛下ノ御宇ニ達ヒ今年始モ紀元二千六百年ニ當レリ
 陛下ノ盛時ニ際シ特ニ 宮中ニ於ケル紀元節ノ祭典ヲ

重クシテ 明治ヲ發シテ臣民率由ノ大道ヲ示シ 恩威ノ
 令ヲ下シテ通ク仁澤ヲ布キヌ

神宮

山陵ヲ 親拜シテ奉敬ヲ申ヘ陸海ノ軍容ヲ 觀閱シテ
 士氣を勵マシ給ヘリ

聖慮深厚ニ 仰テ 臣等 皇太后トシテ恭シク
 天皇陛下 皇后陛下ノ 臨御ヲ仰キ紀元二千六百年奉祝ノ
 會ヲ行フ瑞雲 瑞霧トシテ 宸闕ノ上ヲ 繞リ和氣洋洋トシ
 テ 榮光ノ外ニ 溢ル普天 聖手ヲ 輝ニシテ 同シウシテ
 此ノ盛事ヲ 臨觀セサルナシ 願レハ 世界ハ今 曠古ノ 變局
 ニ 臨メリ

陛下ヲ 異域ニ 用ヒテ 東亞水運ノ 安定ヲ 謀シ盟ヲ 友邦
 ニ 結ビテ 宇内恒久ノ 平和ニ 寄與シ給ハントス

聖慮安遠ニ 感戴ニ 勝ヘス 臣等 和衷協同 皇猷ヲ 贊襄
 シ時 勤ヲ 臣等シテ

天恩ノ 萬一ニ 報イ奉ラント 期ス 臣等 生ヲ 昭代ニ 享
 ケテ 此ノ 昌期ニ 運ヒ 歡天喜地ノ 至ニ 勝フルナシ 恭シク
 表フ上リ 賀フ 陳ヘ以テ 聞ス 臣宣仁 謹ミテ 言ス

舞樂臺中央に進ませられた高松宮殿下の御發聲に参列者一同萬歳を三唱し奉る

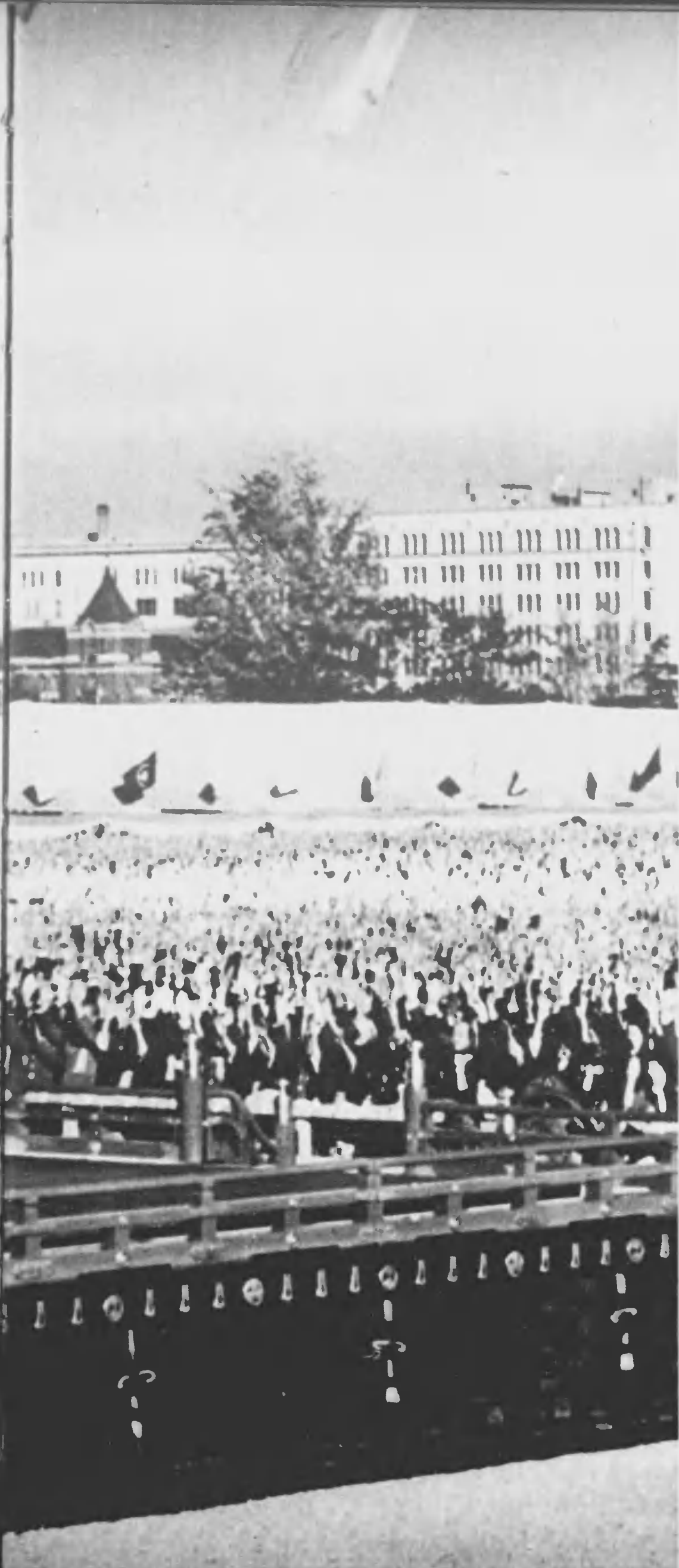
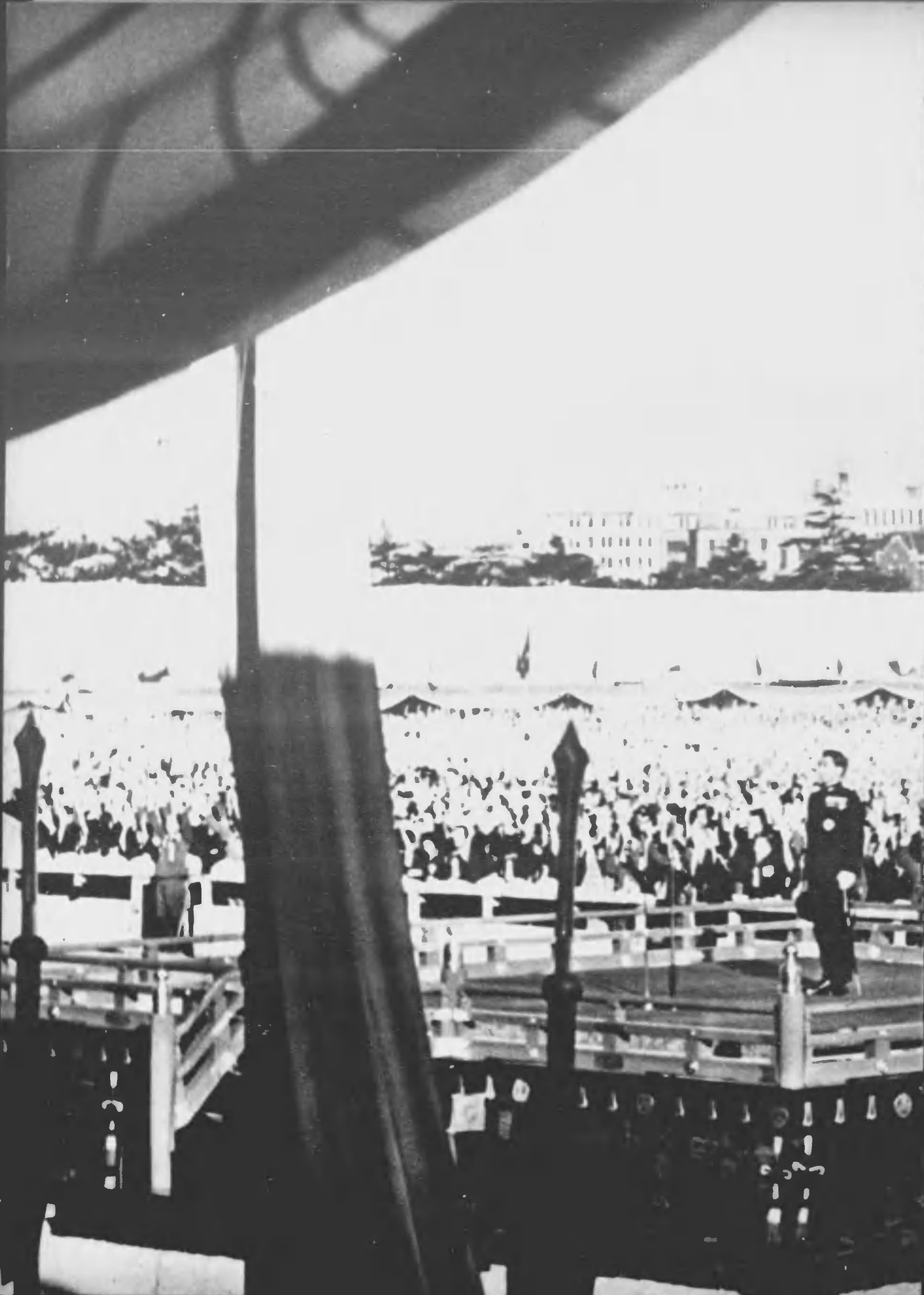
紀元二千六百年式典に参列し侍りて

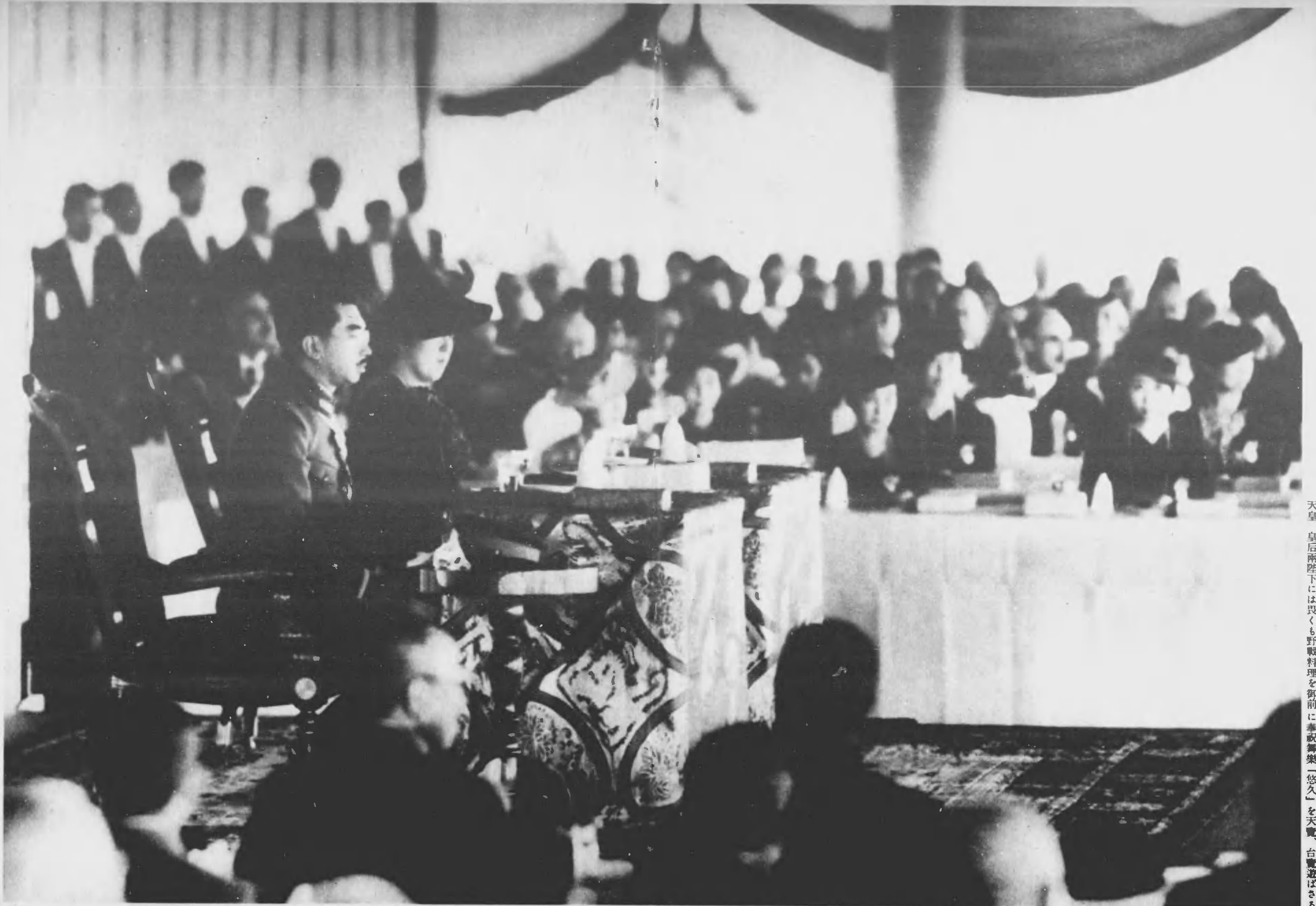
佐佐木 信綱

天にはも瑞雲なびき國土に
 菊かをり満つ大式典壽ぐと

大き亞細亞今し新たに興る秋
 紀元二千六百年をほぎまつる秋

一億の御民のむねをあふれいづる
 萬歳の聲は天もとどろに





天皇 皇后兩陛下には良くも野戰料理を御前に奉祝舞樂「悠久」を天覽、台覽遊ばさる

祝ひ奉る赤誠は津々ののはまて



⇒ 白妙の富士の高嶺に輝は映えて天地轟く
萬歳の聲 山梨縣須知村民の奉祝

⇒ 帝都を埋める歡呼のどよめき、宮城前へ
宮城前へ 赤誠の灯の波、旗の列は十一
日夜から四日間にあたり打ちつづいた



生れ合はせた光榮

菊池 寛 謹記

昭和十五年十一月十日の佳き日、支那事變中にも拘はらず、紀元二千六百年の佳年を、祝賀する式典が、宮城外苑に於て舉行された。
布衣の微臣たる私も、この式典に参列する光榮に浴したことは、感激の至りである。二三日前から天気が定まらず、その日の晴雨を案じてゐた人々は、その日一點の曇もない大空を仰いで今更に神國日本の祥瑞に、感動せぬものはなかつたであらう。午前十時に、参集を終つた五萬數千の参列者は、青雲のたなびく限り、わが日本領土の津々浦々から、各自の感激を胸にこめて馳せ集つた人々である。十時五十分頃、兩陛下の御車はしづかに二重橋上を軋つて式場に着御遊ばされた。五萬の参列者は、肅として水を打つたる如くであつた。近衛首相が御前に進んで壽詞を奏したが、二千六百年前藤原の宮の御即位式に、天神の壽詞を奏した天種子命が、近衛さんの速つ組であることを思ふとき、臣も亦百代の臣たることを考へ、感慨が深かつた。
近衛さんほど系圖はハッキリしないが、参列

の諸臣の血管には當時の式典の準備を司つた天宮命や、牙や柄を採つて式場の内外を護衛し奉つた道臣命や大久米命の血が流れてゐることを考へると、日本民族の一君萬民の姿が、いかに悠久不滅であるかを思ひ、感奮せずには居られなかつた。
近衛さんの壽詞について、長くも勅語を賜つたが、玉の御璽を親しく耳にし奉つた感激は、参列者一同の一生の思い出とならう。やがて八柱にひびくよとばかり、萬歳が三唱され、股々たる皇禮砲のびびきと共に式はめでたく閉ぢられた。
翌十一日は、つゞいて祝賀の宴が開かれた。兩陛下には、悉くも再び親臨遊ばされ、諸臣衆庶と共に野戰料理の御宴を取られ、御盃を舉げたまつた。その日は、高松宮殿下が總裁官御代理として、祝詞を奏し給うたが、そのお聲の美しく壯重なのに感激せぬものはなかつた。外交團總代として、グルー米國大使の祝詞があつたが、明瞭でよく分る英語であつた。この日亦、勅語を賜つた。畏き極みであつた。
自分は、御馳走の興亞パンを喰べた。副饗とかいてあるするめや、ほしえびをかぢりながら二千六百年の歴史を考へ、現代に生れ合はせた幸福と光榮とを、しみん、體得した。





富士山頂 雲が払んで白銀の山頂に萬歳を絶叫



秋田縣 松ヶ崎村の漁師たちが萬歳の時間までの網刺し

祝ひ奉る赤誠は

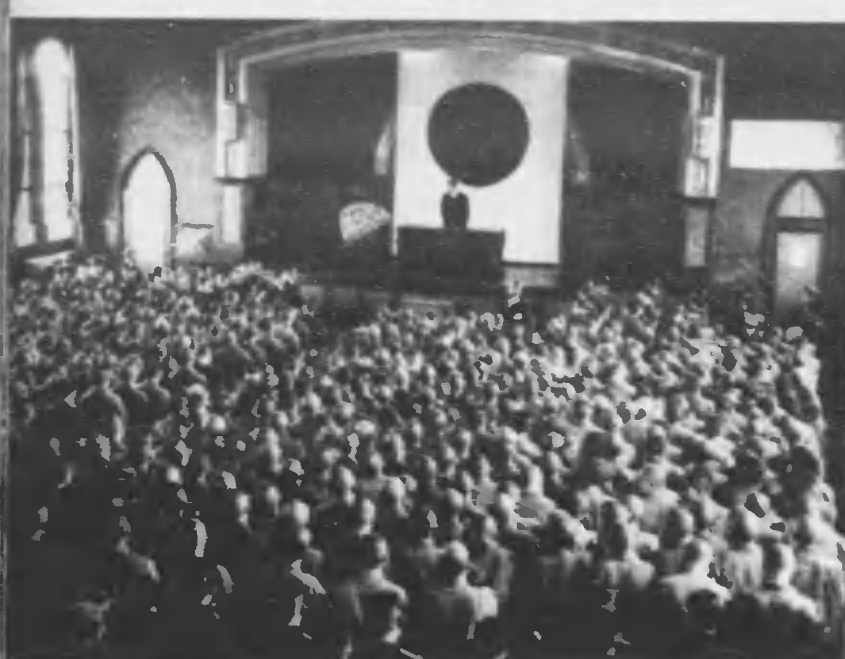
奉祝

元氣に

朗かに

津々のはてまで

大政翼賛會



刑務所でも 密園にあるものも心から奉祝



東京都下 柏原村を練り行く奉祝獅子舞



會津若松市 幼稚園児の訪問に部長長の答禮



伊豆大島 元村の海岸から小學生の奉祝



埼玉県 東吾野村民總出の奉祝行列は村の鎮守様へ



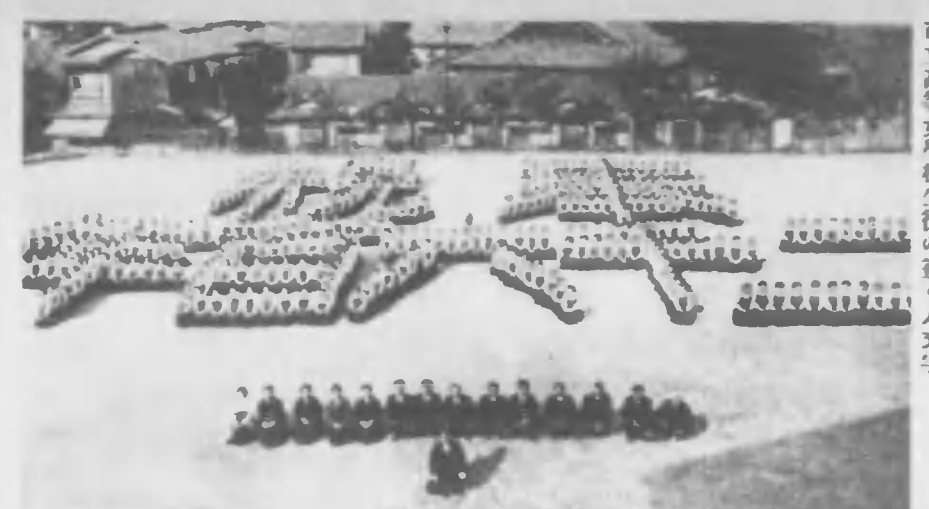
内原訓練所(茨城県) 奉祝式後の記念開墾





徳島県立南神門前に高学年の民衆

祝ひ奉る赤誠は津々ののまて



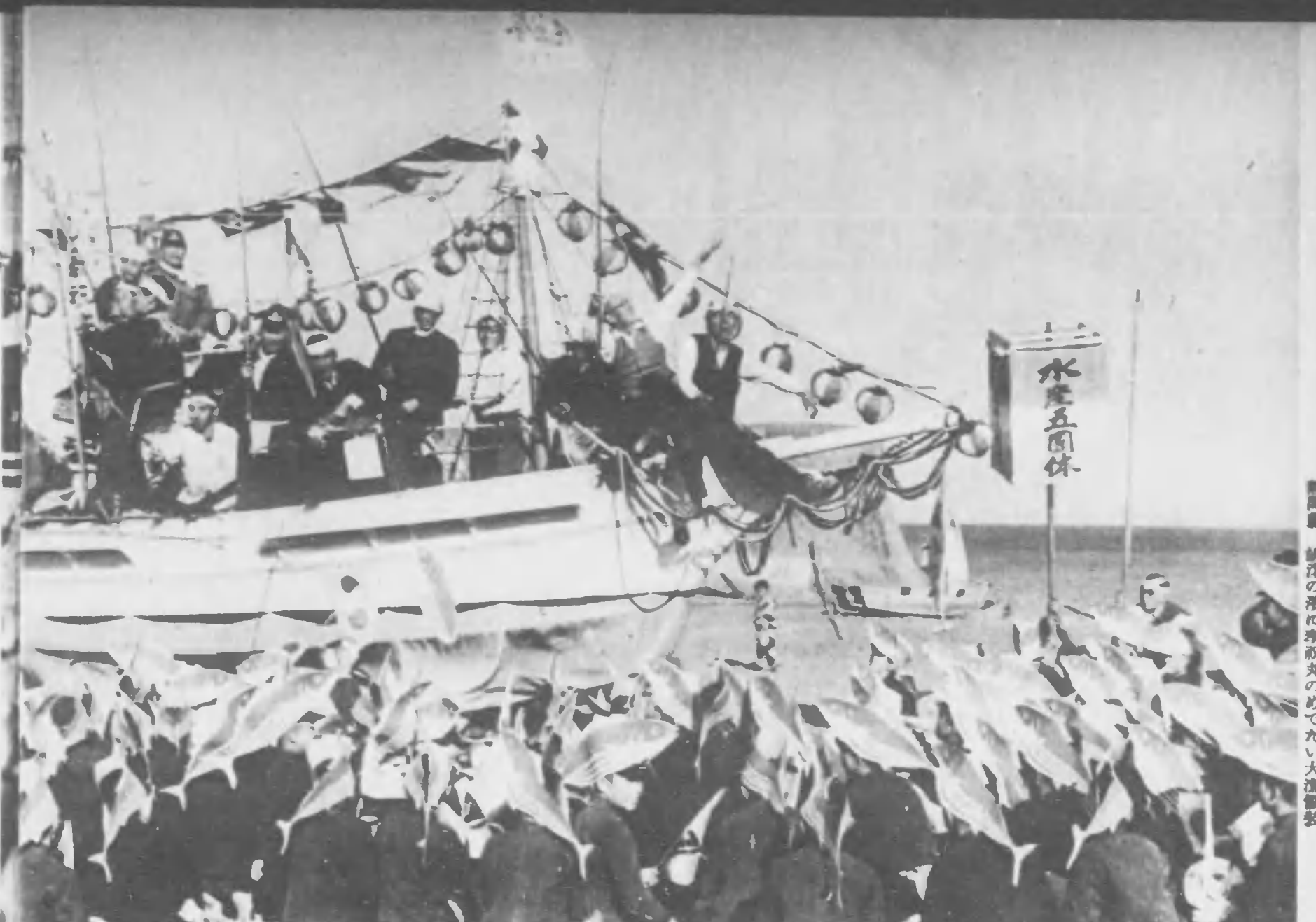
大津市 市立高等女学校生徒の赤く人文字



京都市 御所建前門前に百萬市民の高旗



名古屋市 縣廳、市役所前に行く學童の旗行列



静岡縣 焼津の濱に奉祝丸のめでたい大漁船



大阪市 心齋橋通りのこの日午前十一時二十五分



大阪市 この佳き年に生れた赤ちゃん部隊の奉祝行列



列車中でも 東京發の特急つばめ號車中にもがる高旗



横濱市 華船の獅子舞に賑はよ南京街



新潟市 街に溢れる喜びの人の波、旗の波



松本市 歴史に輝く松本城下にあがる市民の歌呼



朝鮮 朝鮮神宮廣場に京城府民の奉祝



朝鮮 日の丸の旗振りあげて朝鮮兒童の 天皇陛下萬歳



神戶港 裝治中の八幡丸甲板で外國籍人も京城禮拜



三雲郡 笠志村の漁師海女たちが濱に集つての奉祝

てまてはの々津 は誠赤る奉ひ祝



新京 張國務總理の發聲で國務院全議員の高齡奉祝



大連 滿俱樂部を一杯に埋めて全市民の奉祝式



高知縣 初月村の野良に湧きあがる萬歳



廣島市 八丁堀中組が繰り出した假裝行列



ハルビン 遙かに東京の空を望んで奉祝の旗の波



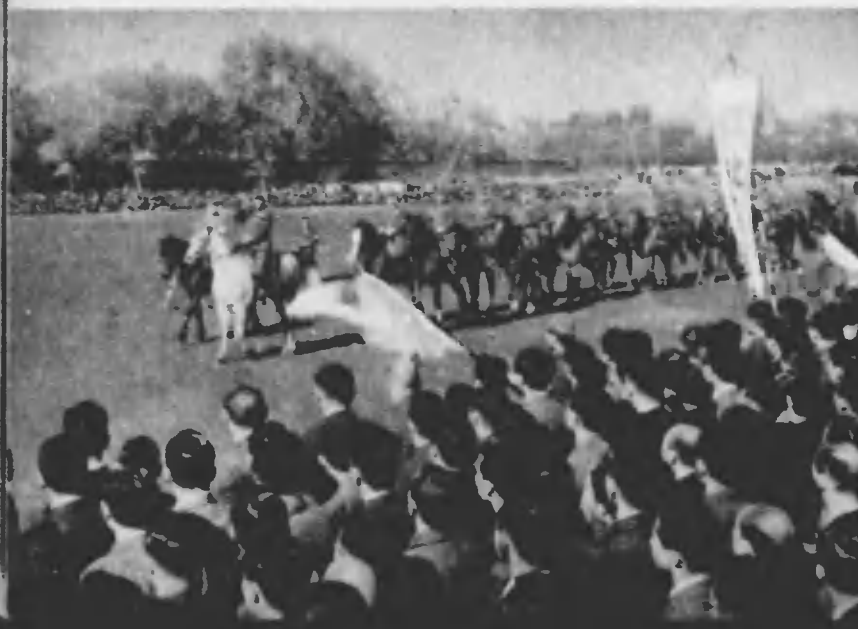
新京 関東軍司令部に梅津軍司令官以下の京城禮拜



長崎市 市役所前の奉祝萬歳——長崎要領司令部許可演



福岡市 宮崎八幡宮社殿に打ち舞よ浦安の舞



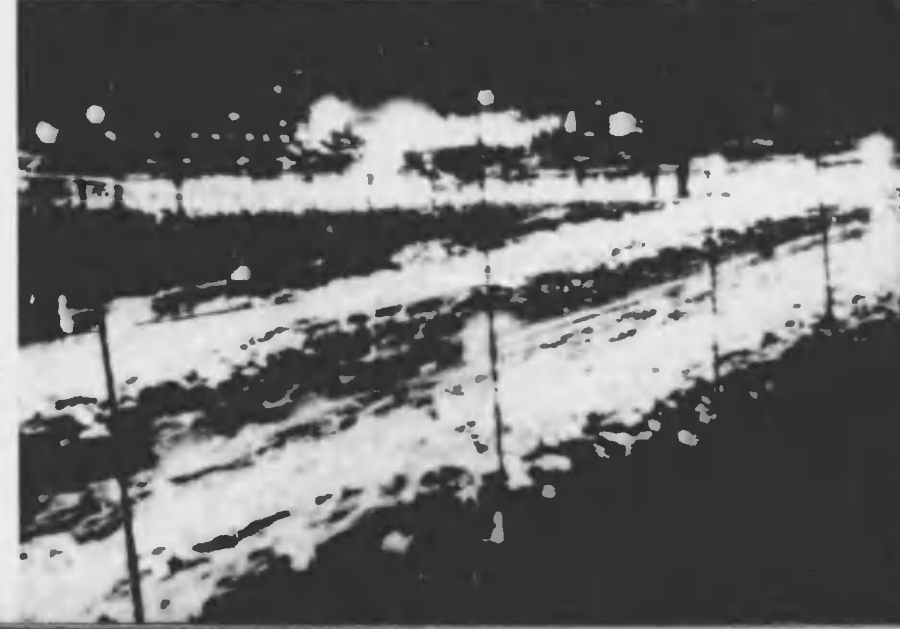
北京 多田最高指揮官の視閲をうけるわが居留民團



海上にも 軍艦沖ノ島が放つ皇禮砲



臺北市 當夏の國の同胞も遙かに聖海の萬歳を奉祝



小倉市 歡喜の奔流、市民の提灯行列 下關要領司令部許可演



明治神宮體育大會夏季大會大學高等專門校對抗トッポ
同秋大會に體育官様像が描かれた人文字



若人はこの喜びを

腕かひなに脚あしに

紀元二千六百年を壽ぐ國民の歡喜と、若人の意氣は、この佳き年の春に、夏に、また秋に、相次いで開かれた各處の體育大會に華やかに力強く燃えあがつた。

紀元二千六百年奉祝東亞競技大會は六月五日から五日間、明治神宮外苑競技場を中心として東京大會が、同月十三日から四日間、横浜神宮外苑競技場を中心として關西大會が、あらゆる競技にわたつて開催され、日本、滿洲國、新生中華民國、蒙古、フィリピン及びハワイの若人二千名が参加、新東亞民族の力の祭典を現出した。

また、紀元二千六百年奉祝第十一回明治神宮國民體育大會は、八月九日から三日間横濱、トッポ、ハービーを中心に行われた夏季大會の海洋競技にはじまり、水上競技は同月二十日から四日間明治神宮外苑水上競技場、秋季大會は十月二十七日から八日間明治神宮外苑競技場を中心として五萬二千の男女若人が参加して各競技にあらん限りの力を振つた。



上海 武裝に輝く上海特別陸隊隊員の北四川路行進



上海 軍艦出雲に島田司令長官以下の宮城遷葬式



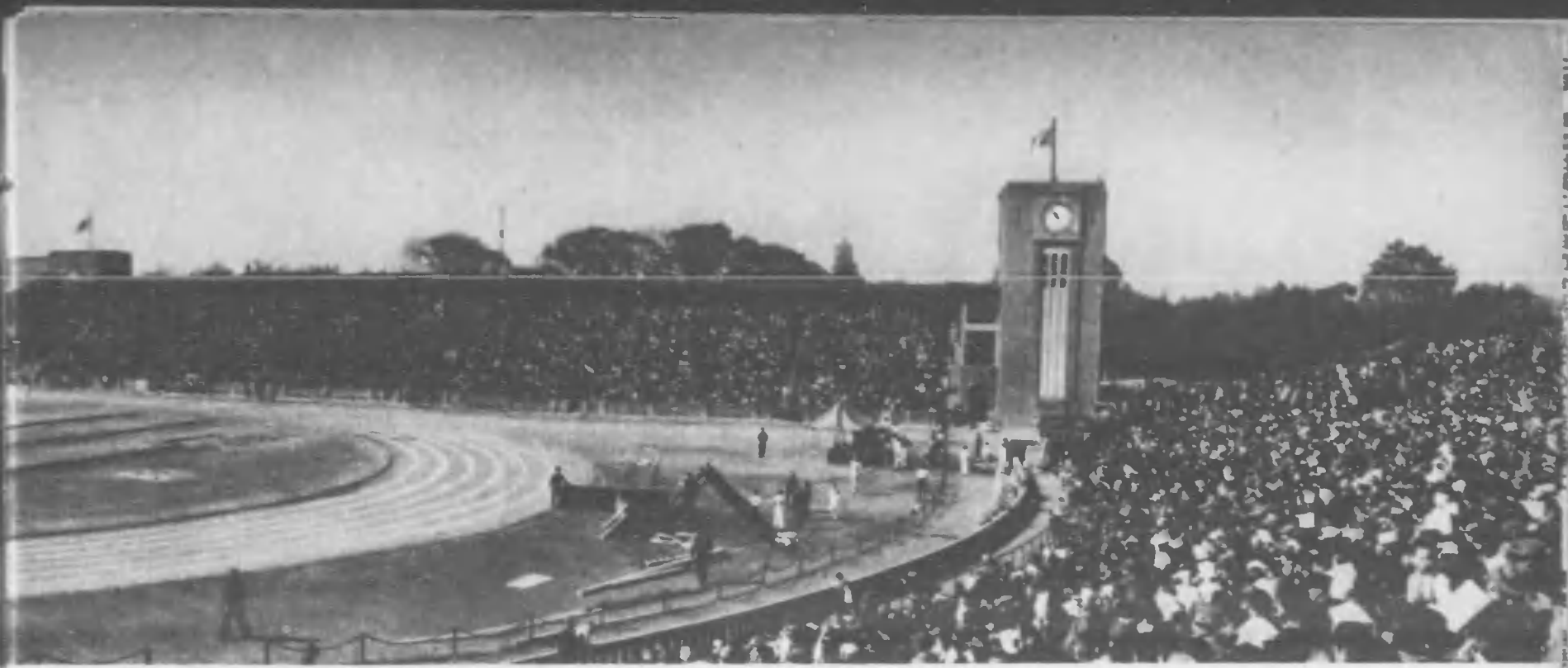
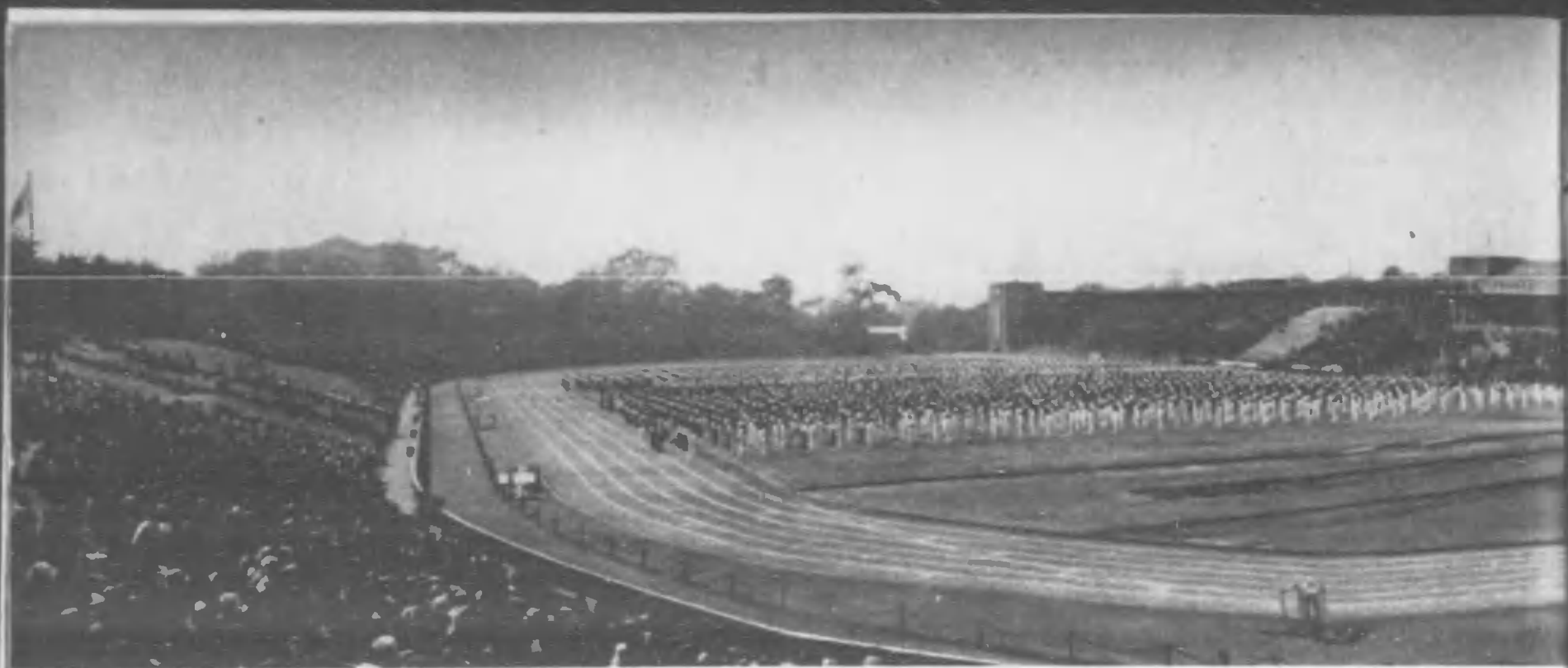
保定 在留のわが國防婦人會員の旅行列



南京 西尾總司令官以下將兵感涙の高談



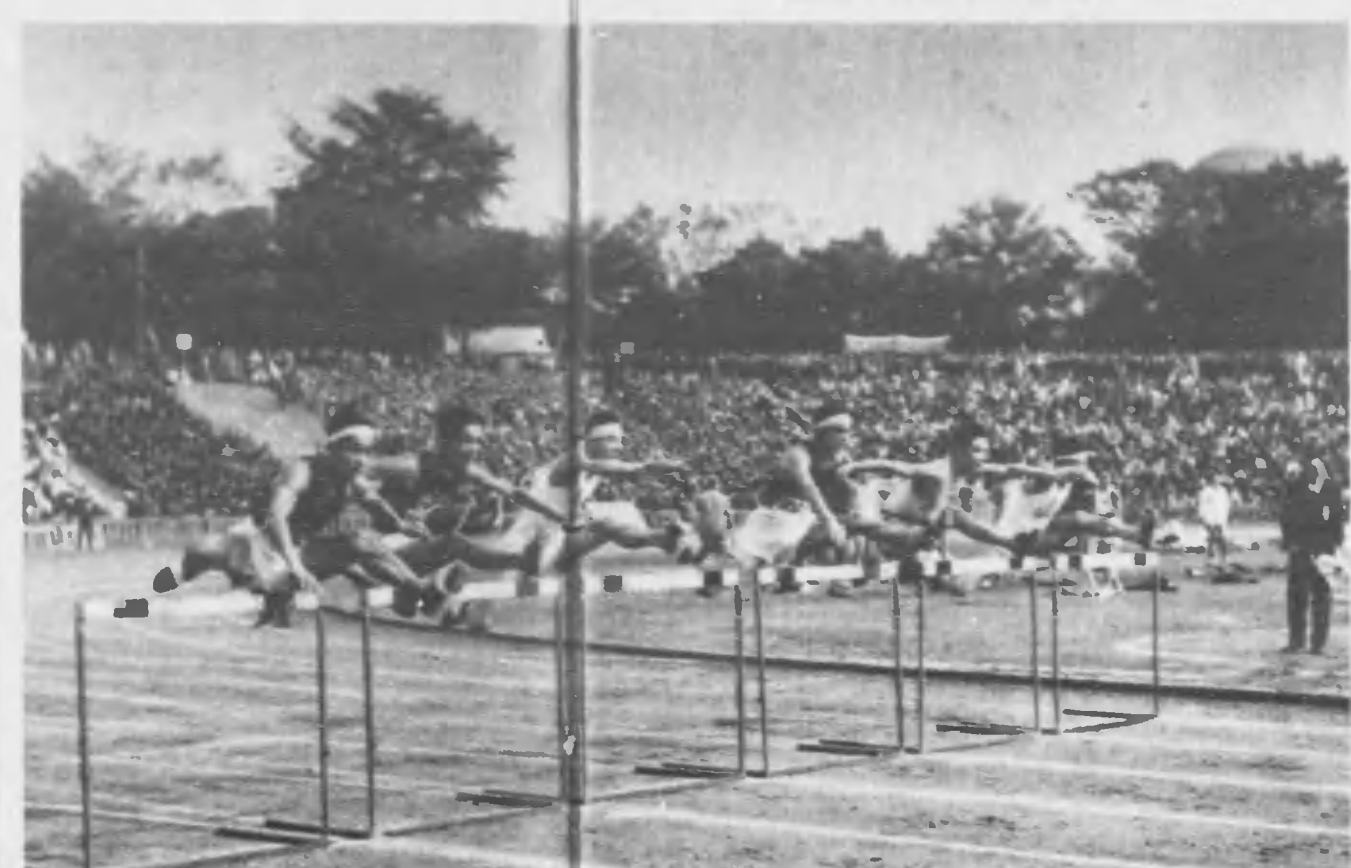
廣東 日軍旗に埋められた奉祝儀裝自動車隊の市中行進



日章旗翻るとして種目進む神宮外苑競技場



力闘取勝を接戦をたて高跳



ファンムーアに事高障り勝



第十一回 明治神宮國民體育大會

外苑の空に四肢美しき女子飛込(水泳上技)



各府青年年対抗の儀技



武裝の若人元一一杯壁障を乗り越え中る等校の國防技

東亞競技大會
東京大會



跳高女子に脚兩を打空



ルーゴ勝決米百四の熱白



下殿南紀同宮文秩の臨台



つゝの型の徳國 技持の華中



撰相古蒙たつらさを氣人の内場



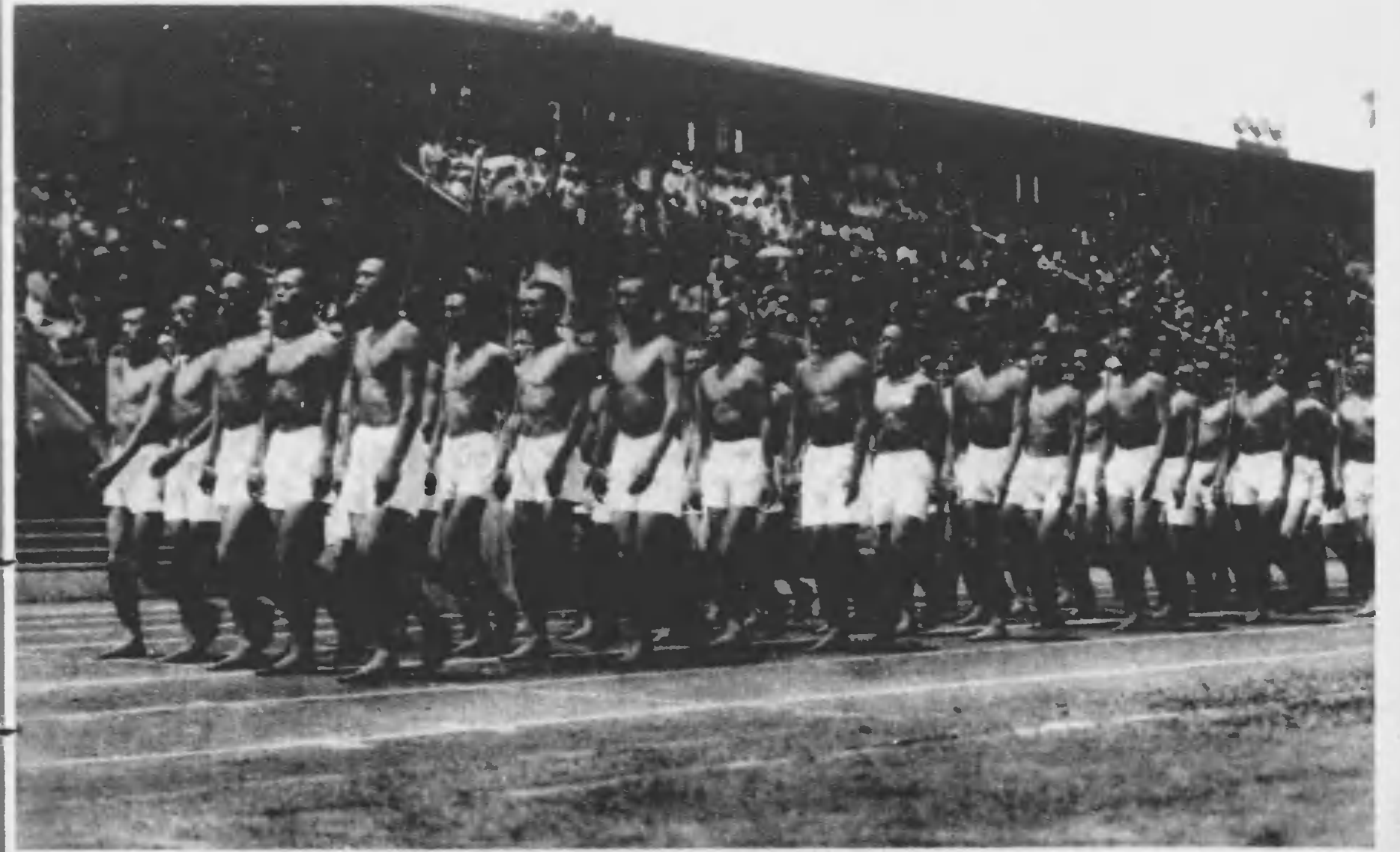
婦人と奕織剛生學ンピリツ



内編てせ合に樂奏の隊樂々軍海陸 日の合開
唱合の名千一徒生校學門專子女都たし堅を



式會閉な遊戯く輝火炬に中の間夕



式場人の團操體國建と刺激氣意の人若

奉祝美術展

昭和十五年秋

わが國美術界がこの佳き年を壽ぎ各派各流を擧げて藝術に彫刀に全力を傾けて精進した紀元二千六百年奉祝美術展覽會は前期、後期の二期に分ち、前期(洋畫、彫刻)は十月一日から二十二日まで、後期(日本畫、工芸)は十一月三日から二十四日まで、これも東京上野公園の府美術館に開かれ、絶好の觀客の波に賑はつた



本日處出日 横山大山 觀作



畫筆遊藝 安田 和彦作



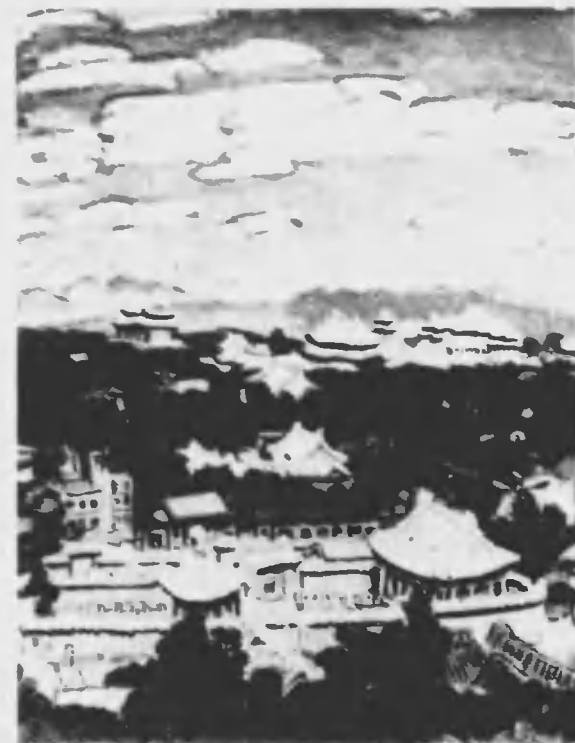
仁港島林 小重 草雲作



號鳴 大田 三郎作



二つの泉に求め 安藤 隆作



城鎮築 梅原 龍三郎作



卓上の丹柱 黒太 重太郎作

くし美 華の能藝

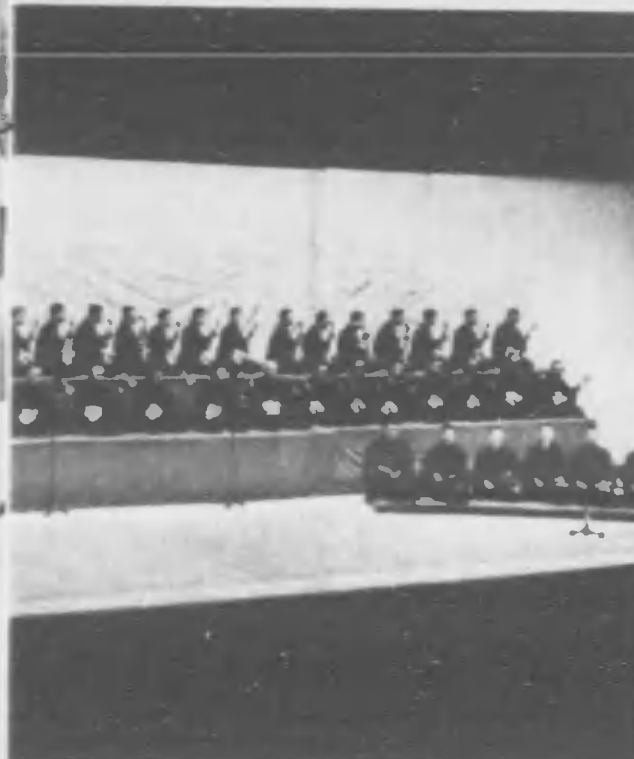
舞かしい歴史を顧み、来るべき時代への新文化建設といふ意圖の下に紀元二千六百年奉祝儀能楽は日本文化中央聯盟の主催によつて佳き歳一ヶ年間にわたつて行はれた

員動能元家界界能

冠元 明長

門能右勘、齊助、元家能開華『山見鳥』踊舞典古新

座一助之京川市『帳連動きいひ舞』伎舞歌



園劇協新『暖開佛大』劇新

國樂舞文新『曲組』

踊舞本日』樂音

園踊舞漢井石『動脈の進前』踊舞代現



社合式林武寫動活本日『史 歴』画映

座樂文『樂』

音補』樂文

中社杖節藤藤『起練士富』踊舞新



會大誓祈公奉後銃

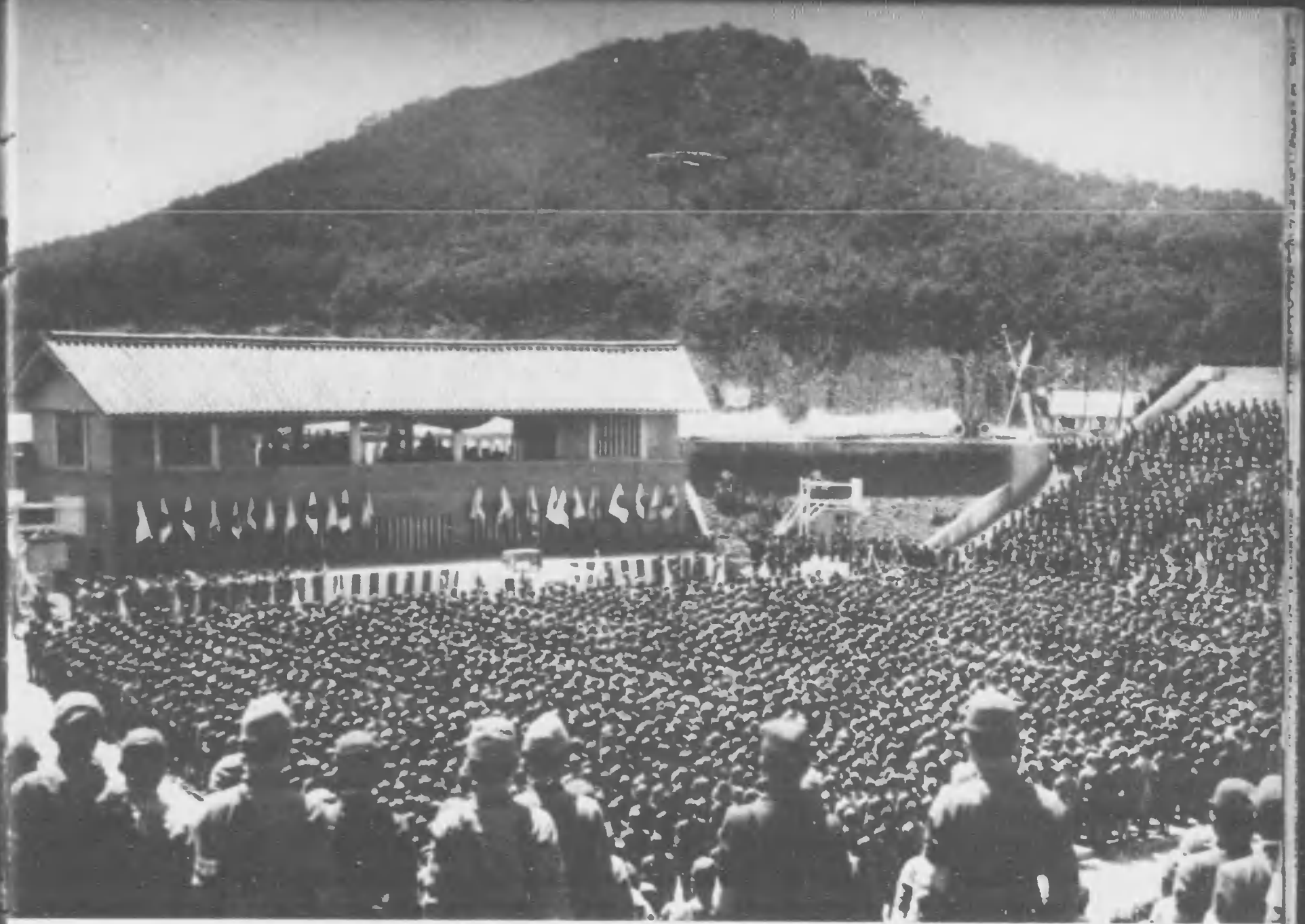
秩父宮殿下の権原神宮御参拜を神苑に迎へ奉る大會関係者

⇒ 往年の紀元節に賜つた詔書を御聖廟々と御奉讀遊ばされる秩父總統官殿下



⇒ 青葉齋る建國の聖地に全員起立して狂歌なる國歌齊唱

紀元二千六百年奉祝會主催銃後奉公祈誓大會は六月十九日畏くも秩父總統官殿下の合臨を仰ぎ聖地権原神宮神域に於て盛大に舉行された。この日の盛儀に参列したものは大日本青年團、産業報國聯盟、國防婦人會、軍人銃後會、帝國在籍軍人會、大日本傷痍軍人會その他を合せ三十六團體、二萬三千名。總統官殿下の詔書御奉讀後、一同聖業の完遂と皇軍の武運長久を祈念、誓々忠報國の決意を固めた



全日本軍用保護馬
繼走大騎乗

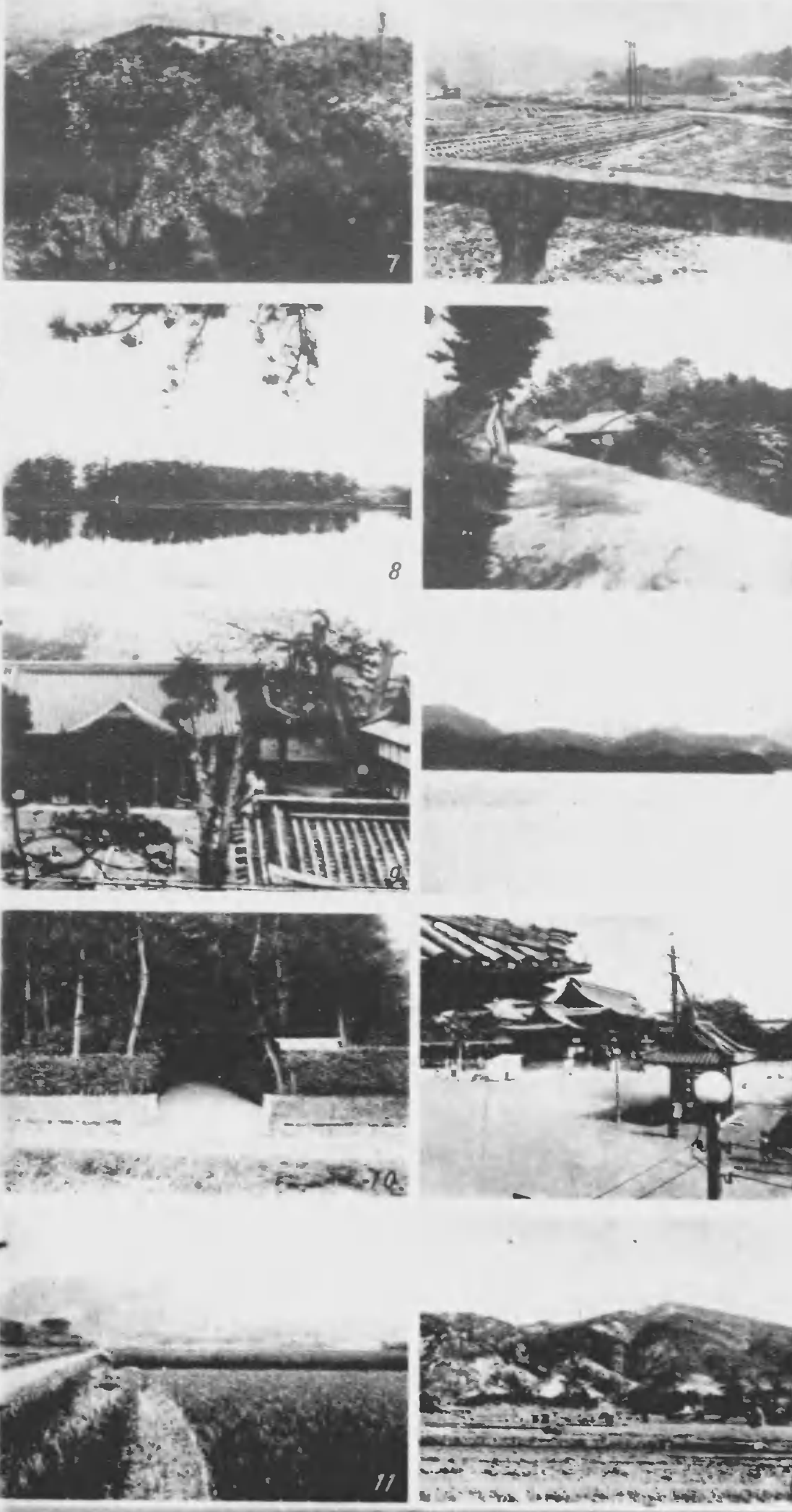
軍用保護馬鐵線と愛馬思想の普及徹底をはかる馬事界の一大壯舉、紀元二千六百年奉祝全日本軍用保護馬繼走大騎乗は十月七日南下、北上兩班に分れ、一道三府二十六縣に蹄跡を響かせ、神旗を捧持して同月二十四日の軍馬祭當日何れもそのゴール権原神宮、明治神宮に到達した

この兩班の走破コースは二千六百年に因んだ堂々二千六百キロ、南下班は旭川市北海道護國神社を出發して権原神宮へ、北上班は宮崎市宮崎神宮を出發して明治神宮へ何れも騎乗の途についたものである

⇒ 蹄の音も響く軍馬騎乗隊は輻輳と続く
住吉神社社頭で神旗の引継ぎを行ふ關隊と大幸府隊
下左神旗を捧持して沿道を進む騎乗隊

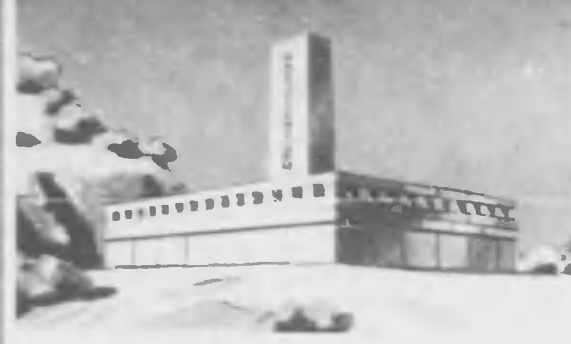
神武天皇 聖蹟

- 1 神武天皇聖蹟推考地
所在地 大分県宇佐郡
地跡地 凡三北郡城村大字和氣、大字津野附近より宇佐町大字津野、津野附近に在る地跡地。
御事蹟 天武天皇が、筑紫の國に於て、神武天皇が甲寅年（御即位前七年）十月舟師をひきみて日向を御進發になり、遠敷の門を御進發し給うた所である。
- 2 神武天皇聖蹟水門
所在地 福岡県遠賀郡遠賀町
地跡地 遠賀町の遠賀川河口附近の地跡地。
御事蹟 遠敷の門を、筑紫の國に於て、神武天皇が甲寅年（御即位前七年）十月舟師をひきみて日向を御進發になり、遠敷の門を御進發し給うた所である。
- 3 神武天皇聖蹟水門
所在地 福岡県安曇郡中町
地跡地 凡三北郡城村大字和氣、大字津野附近より宇佐町大字津野、津野附近に在る地跡地。
御事蹟 天武天皇が、筑紫の國に於て、神武天皇が甲寅年（御即位前七年）十月舟師をひきみて日向を御進發になり、遠敷の門を御進發し給うた所である。
- 4 神武天皇聖蹟高橋遺跡
所在地 岡山県児島郡神戶町
地跡地 大字高橋、浦上高橋、御事蹟 高橋宮は、神武天皇が御東征の際乙卯年（御即位前六年）春三月吉備の國に入り給うた間、宮まされた行宮であつて、三年の間ましまして、舟や兵食をととのへ給うた所である。
- 5 神武天皇聖蹟瀬波遺跡
所在地 大阪府大阪市
地跡地 凡三北郡の天満附近に在る地跡地。
御事蹟 瀬波宮は、神武天皇が御東征の際乙卯年（御即位前三年）二月舟師をひきみて到り給うた所であつて、その御事蹟が遺蹟であつたため、浪速の國の名を得、のち瀬波となつたのである。
- 6 神武天皇聖蹟高橋遺跡
所在地 大阪府中河内郡孔舎衛村
地跡地 孔舎衛村の山麓地跡地。
御事蹟 高橋宮は、神武天皇が御東征の際乙卯年（御即位前三年）三月舟師をひきみて草香邑の神宮白河の津に到り給ひ、翌四月孔舎衛坂で長鬚彦の軍と戦はせられて又此處に退り給ひ、居を建て、雄たけびと改めたのでその津の名を高橋と改めたのである。
- 7 神武天皇聖蹟高橋遺跡
所在地 大阪府中河内郡孔舎衛村
地跡地 凡三北郡の天満附近に在る地跡地。
御事蹟 高橋宮は、神武天皇が御東征の際乙卯年（御即位前三年）二月舟師をひきみて到り給うた所であつて、その御事蹟が遺蹟であつたため、浪速の國の名を得、のち瀬波となつたのである。
- 8 神武天皇聖蹟水門遺跡
所在地 大阪府泉南郡樟井町、雄信連村
地跡地 樟井町大字樟井の西部より雄信連村大字男里宇天神及びその附近に在る地跡地。
御事蹟 雄水門（日本書紀）は、神武天皇が御東征の際乙卯年（御即位前三年）五月舟師をひきみて茅渚山城水門に到り給うたところ、皇兄彦五瀨命が矢狭の病みか蓋たして、劍を擲して雄たけびと改めたので、時の人々が雄水門と稱へたものである。
- 9 神武天皇聖蹟水門遺跡
所在地 和歌山縣和歌山市
地跡地 小野町及びその附近の地跡地。
御事蹟 水門（古事記）は、神武天皇が御東征の際伊弉國の此處に到り給うたところ、皇兄彦五瀨命が勇たけびと改めたので、雄水門と稱へたものである。
- 10 神武天皇聖蹟山
所在地 和歌山縣海南郡三田村
地跡地 海南郡の山麓地跡地。
御事蹟 山は、神武天皇が御東征の際乙卯年（御即位前三年）五月舟師をひきみて此處に到り給ひ、皇兄彦五瀨命が勇たけびと改めたので、御事蹟になつた所である。
- 11 神武天皇聖蹟名草邑推考地
所在地 和歌山縣海南郡、和歌山市
地跡地 凡三北郡城村大字和氣、大字津野附近より宇佐町大字津野、津野附近に在る地跡地。
御事蹟 天武天皇が、筑紫の國に於て、神武天皇が甲寅年（御即位前七年）十月舟師をひきみて日向を御進發になり、遠敷の門を御進發し給うた所である。



紀元二千六百年奉祀記念事業の一つとして文部省は昭和十三年六月紀元二千六百年奉祀記念の委嘱によつて神武天皇聖蹟を鹿兒島、宮崎、大分、福岡、廣島、岡山、大阪、和歌山、三重、奈良等の凡そ十府縣に互つて、御遺蹟の地と傳へられる箇所について慎重調査した結果、攝津神宮及び龜山の二聖蹟のやうに既に國家的に確認されてゐるものは別として、外に十九件を決定した。

り、以後筑紫、安藝、吉備の國々を經させられて、難波に到り給ひ、河内から更に紀伊に廻られ、遂に大和に入らせ給ひ、天下を御平定あらせられて、ここに成し遂げられたものである。この神武御創業の御事蹟は日本書紀、古事記にあらはれてゐるが、この記念事業は神武天皇の御創業の御事蹟を明らかにして、御盛徳を永く景仰し奉る趣旨であつて、この決定は慎重の上にも慎重を極めたものである。



- 12 神武天皇聖蹟狹野
所在地 和歌山縣新宮市
地跡地 狹野の邊
御事蹟 狹野は、神武天皇が御東征の際乙卯年（御即位前三年）六月舟師をひきみて越え給うた所である。此處より狹野神宮に御進發し給うた所である。
- 13 神武天皇聖蹟狹野
所在地 和歌山縣新宮市
地跡地 狹野の邊
御事蹟 狹野神宮は、神武天皇が御東征の際乙卯年（御即位前三年）六月舟師をひきみて越え給うた所である。
- 14 神武天皇聖蹟高橋遺跡
所在地 岡山県児島郡神戶町
地跡地 大字高橋、浦上高橋、御事蹟 高橋宮は、神武天皇が御東征の際乙卯年（御即位前六年）春三月吉備の國に入り給うた間、宮まされた行宮であつて、三年の間ましまして、舟や兵食をととのへ給うた所である。
- 15 神武天皇聖蹟高橋遺跡
所在地 大阪府中河内郡孔舎衛村
地跡地 孔舎衛村の山麓地跡地。
御事蹟 高橋宮は、神武天皇が御東征の際乙卯年（御即位前三年）三月舟師をひきみて草香邑の神宮白河の津に到り給ひ、翌四月孔舎衛坂で長鬚彦の軍と戦はせられて又此處に退り給ひ、居を建て、雄たけびと改めたのでその津の名を高橋と改めたのである。
- 16 神武天皇聖蹟高橋遺跡
所在地 大阪府中河内郡孔舎衛村
地跡地 凡三北郡の天満附近に在る地跡地。
御事蹟 高橋宮は、神武天皇が御東征の際乙卯年（御即位前三年）二月舟師をひきみて到り給うた所であつて、その御事蹟が遺蹟であつたため、浪速の國の名を得、のち瀬波となつたのである。
- 17 神武天皇聖蹟高橋遺跡
所在地 大阪府泉南郡樟井町、雄信連村
地跡地 樟井町大字樟井の西部より雄信連村大字男里宇天神及びその附近に在る地跡地。
御事蹟 雄水門（日本書紀）は、神武天皇が御東征の際乙卯年（御即位前三年）五月舟師をひきみて茅渚山城水門に到り給うたところ、皇兄彦五瀨命が矢狭の病みか蓋たして、劍を擲して雄たけびと改めたので、時の人々が雄水門と稱へたものである。
- 18 神武天皇聖蹟高橋遺跡
所在地 和歌山縣和歌山市
地跡地 小野町及びその附近の地跡地。
御事蹟 水門（古事記）は、神武天皇が御東征の際伊弉國の此處に到り給うたところ、皇兄彦五瀨命が勇たけびと改めたので、雄水門と稱へたものである。
- 19 神武天皇聖蹟山
所在地 和歌山縣海南郡三田村
地跡地 海南郡の山麓地跡地。
御事蹟 山は、神武天皇が御東征の際乙卯年（御即位前三年）五月舟師をひきみて此處に到り給ひ、皇兄彦五瀨命が勇たけびと改めたので、御事蹟になつた所である。
- 20 神武天皇聖蹟名草邑推考地
所在地 和歌山縣海南郡、和歌山市
地跡地 凡三北郡城村大字和氣、大字津野附近より宇佐町大字津野、津野附近に在る地跡地。
御事蹟 天武天皇が、筑紫の國に於て、神武天皇が甲寅年（御即位前七年）十月舟師をひきみて日向を御進發になり、遠敷の門を御進發し給うた所である。
- 21 神武天皇聖蹟狹野
所在地 和歌山縣新宮市
地跡地 狹野の邊
御事蹟 狹野は、神武天皇が御東征の際乙卯年（御即位前三年）六月舟師をひきみて越え給うた所である。此處より狹野神宮に御進發し給うた所である。

寫真週報



支那 貯蓄債券 事變 報國債券

一枚 十圓・五圓

二十二月十日 ← 三十日 → 賣出期間

大藏省 日本勸業銀行

內閣印刷局印刷發行

貯蓄債券 A4規格定額は500円・1000円